

吹田市

# 吹田操車場遺跡16

北大阪健康医療都市(健都)2街区高齢者向けウェルネス住宅整備・運営事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018年6月

公益財団法人 大阪府文化財センター

吹田市

# 吹田操車場遺跡16

北大阪健康医療都市（健都）2街区高齢者向けウェルネス住宅整備・運営事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



## 序 文

吹田操車場遺跡は、大阪府北部、淀川北岸の吹田市に所在します。この遺跡は、かつて「東洋一の操車場」と称された旧国鉄吹田操車場を中心にはぎります。その面積は広大で、様々な時代の多種多様な遺構・遺物が、これまでの調査で発見されております。

吹田市は操車場跡地において、北大阪健康医療都市(愛称：健都(けんと))を標榜した「健康・医療のまちづくり」を進めているところであり、現在正に巨大な医療施設を建設中であります。

私たちセンターは、平成10年より当遺跡の調査を担って参りました。これまでに15冊に上る報告書を刊行し、重要な成果を蓄積しております。

このたびの報告書は、北大阪健康医療都市(健都)2街区高齢者向けウェルネス住宅整備・運営事業に伴って行われた発掘調査の成果になります。収載した内容をご覧いただければ、我々が日常の生活を送る足下に、どれほど豊かな歴史が埋もれているのか、ご理解いただけるのではないでしょうか。

街の様子が大きく変わりつつあります。しかし、この地に刻まれた歴史は変わることはありません。これまでの調査成果を、吹田市のみならず多くの地域で活用されることを願ってやみません。本書が吹田操車場遺跡を考究する上での一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、吹田市健康医療部地域医療推進室・北大阪健康医療都市推進室、パナホーム株式会社、安西工業株式会社、大阪府教育庁、吹田市教育委員会、地元自治会を始めとした関係各位の多大なご協力を賜りました。衷心より感謝いたします。

今後とも、埋蔵文化財調査について、また当センターの事業について、多くの方々のご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成30年6月

公益財団法人 大阪府文化財センター  
理 事 長 田邊 征夫



## 例　　言

1. 本書は、大阪府吹田市岸部新町6番及び7番における吹田操車場遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、北大阪健康医療都市(健都)2街区高齢者向けウェルネス住宅整備・運営事業に伴い、安西工業株式会社より委託を受け、吹田市教育委員会文化財保護課及び大阪府教育庁の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 調査及び整理に関する受託名称・調査名・受託期間・体制は、以下の通りである。

受託名称：北大阪健康医療都市(健都)2街区高齢者向けウェルネス住宅整備・運営事業に伴う

吹田操車場遺跡発掘調査

調査名：吹田操車場遺跡 17-2

受託期間：平成29年10月2日～平成30年6月29日

調査体制：吹田市教育委員会 地域教育部 文化財保護課(文化財保護担当)

　　課長 西本安秀、主幹 田中充徳、主査 賀納章雄、河合智子、増田真木、堀口健二(非常勤職員)

　　公益財団法人大阪府文化財センター

　　事務局次長：江浦 洋(平成30年1月1日より事務局長)

　　調整課長：岡本茂史(平成30年1月1日より事務局次長兼務)

　　調査課長補佐：三好孝一、副主査：鹿野 垑

4. 現地調査の写真撮影は調査担当者が、遺物写真撮影は調査課写真室が、木製品の樹種同定及び種実同定は、調査課専門員山口誠治が行った。
5. 発掘調査及び整理作業の過程で、以下の方々並びに諸機関にご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。  
岡本敏行(大阪府教育庁)、田中充徳・増田真木(吹田市教育委員会)、吹田市健康医療部地域医療推進室・北大阪健康医療都市推進室、パナホーム株式会社、安西工業株式会社、中世土器研究会
6. 本書の編集・執筆は、非常勤職員の協力の下、鹿野が行った。なお、第2章第1節位置・地理的環境及び第2章第2節歴史的環境については、これまでの調査と変わるものではないため、当センター発行の吹田操車場遺跡に関する既刊の発掘調査報告書から引用し、一部加筆修正したものである。
7. 本書に関わる写真・実測図などの記録類、出土遺物は、吹田市教育委員会において保管している。広く活用されることを希望する。

## 凡　　例

1. 遺構図及び断面図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用している。図中の標高は、すべて東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値であり、T.P.+は省略した。
2. 座標値は世界測地系（測地成果2000）による平面直角座標系第VI系に基づき表示し、単位はすべてmであり、mは省略した。
3. 全体図及び遺構実測図の方位は、いずれも国土座標軸第VI系の座標北を示す。  
(なお、真北は東に0°15'、磁北は真北に対し西に7°14'傾く)
4. 現地調査及び遺物整理に際しては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠した。
5. 土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006年度版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修を用いた。土層の記載方法は、記号・土色名・土質名の順とする。（例：10Y4/2 オリーブ灰 シルト）
6. 遺構番号は、調査区に関係なく1から順に付した。遺構番号-遺構名として表現した。  
(例：「1溝」・「2ピット」)
7. 遺構図における断面位置は、図面上に「-●」によって示した。
8. 遺物実測図の縮尺は、4分の1を基本とするが、金属器などで小型のものは3分の1で掲載するなど、遺物の大きさに即した縮尺としたため、一部はこの限りではない。各図面にはスケールを付しているので参照されたい。また、写真図版の遺物はスケールを統一していない。
9. 遺物実測図は断面をすべて黒塗りで表現した。
10. 掲載遺物は、通し番号を付し、本文・挿図・写真図版・一覧表とともに一致する。掲載遺物番号は1~110。
11. 本書を作成するにあたり、弥生土器は森田克行1990、古墳時代の土師器は寺沢薰1986・辻1999、須恵器は田辺昭三1981、古代の土器については古代の土器研究会編1992・1993・1994、中世の土器は中世土器研究会編1998に拠った。上記以外のものは個別に典拠を記した。
12. 引用文献及び参考文献は巻末（35頁）にまとめた。
13. 当センター名を「大文セ」と略称することがある。

## 目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
目 次	
第1章 調査の経緯と経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 位置・地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第3節 既往調査区の成果	8
第3章 調査の方法	12
第1節 現地調査	12
第2節 整理作業	14
第4章 調査成果	15
第1節 基本層序	15
第2節 遺構と遺物	19
第5章 総括	33
引用・参考文献	
掲載遺物一覧表	
写真図版	
報告書抄録	

## 挿図目次

図1 調査地位置	1	図13 9流路A 出土遺物(1)	22
図2 周辺の地質	4	図14 9流路A 出土遺物(2)	23
図3 周辺の遺跡分布	6	図15 9流路B 出土遺物	24
図4 既往調査及び今次調査位置	9	図16 9流路C・D 出土遺物	25
図5 地区割(1)	13	図17 6土坑 平・断面	27
図6 地区割(2)	13	図18 6土坑 出土遺物(1)	28
図7 東区 東壁断面	16	図19 6土坑 出土遺物(2)	29
図8 東区 南壁断面	17	図20 10溝 断面	31
図9 西区 南壁断面	18	図21 10溝 出土遺物	31
図10 池の想定	18	図22 7溝 出土遺物	31
図11 調査区平面	20	図23 機械掘削 出土遺物	32
図12 9流路 平面	21	図24 周辺調査成果合成	34

## 表目次

表1 吹田操車場遺跡調査一覧	10
----------------	----

## 写真目次

写真1 現地調査風景	3	写真2 現地調査及び整理作業風景	14
------------	---	------------------	----

## 写真図版目次

写真図版1	2.	6土坑 遺物出土状況(南から)
1. 西区 南壁断面(西から)	3.	6土坑 遺物出土状況(北から)
2. 西区 南壁断面(北から)	写真図版7	1. 6土坑 最下層遺物出土状況(北から)
3. 東区 東壁断面(南から)	2.	10溝 断面(南東から)
4. 東区 東壁断面(南から)	3.	10溝 全景(北西から)
写真図版2	写真図版8	1. 9流路 遺物出土状況(北から)
1. 東区 南壁断面(西から)	2.	9流路 遺物出土状況(南西から)
2. 東区 南壁断面(北西から)	3.	9流路 遺物出土状況(北から)
3. 東区 南壁断面(北西から)	4.	9流路 遺物出土状況(東から)
4. 東区 南壁断面(北西から)	5.	9流路 遺物出土状況(南から)
写真図版3	6.	9流路 遺物出土状況(東から)
1. 東区 全景(南西から)	写真図版9	9流路 出土遺物
2. 東区 垂直写真	写真図版10	9流路 出土遺物
写真図版4	写真図版11	9流路 出土遺物
1. 西区 全景(北から)	写真図版12	9流路 出土遺物
2. 西区 全景(北から)	写真図版13	6土坑 出土遺物
写真図版5	写真図版14	6土坑 出土遺物
1. 東区 全景(北から)	写真図版15	6土坑・10溝・7溝 出土遺物
2. 9流路(南東から)		
写真図版6		
1. 6土坑 断面(南東から)		

## 第1章 調査の経緯と経過

昭和59年(1984)にその役割を終えた旧国鉄吹田操車場跡地に、平成10年(1998)、当時の日本国有鉄道清算事業団近畿支社により、JR梅田貨物駅の機能の一部を吹田操車場跡地へ移管する計画が持ち上がった。同年、同社は大阪府教育委員会(現:大阪府教育庁、以下略)と協議の後、移転用地内全域を対象として遺跡の確認調査を行った。その結果、操車場造成時に分厚い盛土が施されていたことにより、調査トレンドの大半で多様な遺構が存在することが明らかとなった。出土遺物や検出した遺構の検討から、旧石器時代から中世に至る広範な複合遺跡であることが判明し、遺跡範囲が操車場跡地のほぼ全域に拡大した。平成11年(1999)、梅田貨物駅の吹田操車場跡地への移転計画に関する基本協定書及び確認書の締結が成された。そして、吹田信号場駅基盤整備工事の計画に伴い、大阪府教育委員会と日本鉄道建設公団(当時)との協議が行われ、平成12年(2000)から駅舎・倉庫・遊水池他の計画地について継続的に発掘調査が実施されてきた。

一方、貨物ヤード(後の吹田貨物ターミナル駅)に使用される以外の操車場跡地について、吹田市は操車場跡地の北西側約15ヘクタールにおいて「緑と水につつまれた健康・教育創生拠点の創出」を目指したまちづくり計画の策定を進めた。整備計画を進める上で、埋蔵文化財の状況を把握するため、独立行

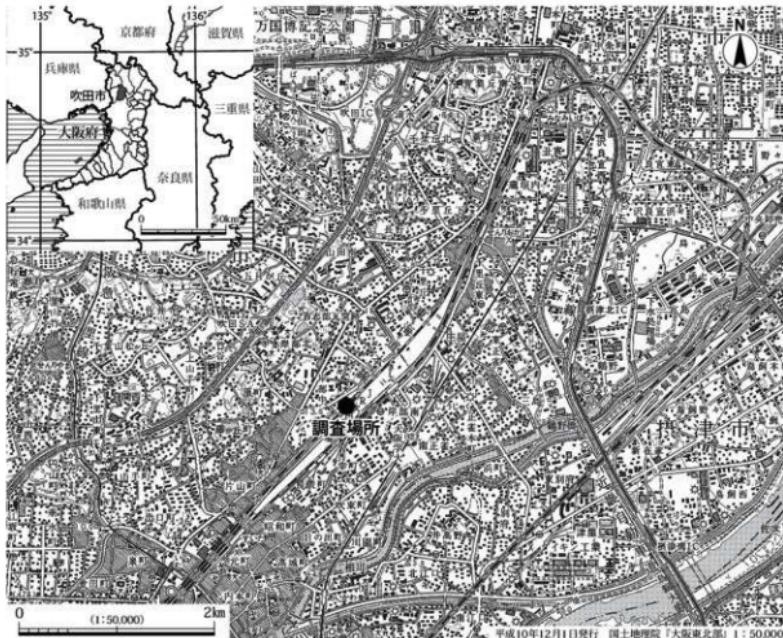


図1 調査位置

政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構と吹田市が協議し、吹田市域59箇所で操車場跡地内のまちづくり用地の遺跡確認調査が平成19・20年(2007・2008)に実施された。その後、平成21年(2009)4月に、まちづくり用地の土地地区画整理事業の事業計画及び施行規程の認可が告示され、北部大阪都市計画事業吹田操車場跡地地区画整理事業が始まった。それに伴い、当センターが独立行政法人都市再生機構西日本支社より委託を受け、平成21~24年(2009~2012)度に、吹田市教育委員会の協力を得ながら、発掘調査を実施することとなった。

そして、吹田市は当該地区における国立循環器病研究センターの移転に併せ、隣地に市立吹田市民病院を移設することを決定し、2つの医療機関を中心として、医療機関と医療関連企業などが集積した複合医療産業拠点(医療クラスター)の形成を目指す方向となった。こうしたまちづくりの方向性から、平成27年(2015)に、地区的名称を北大阪健康医療都市[愛称:健都(けんと)]とした。

また、吹田市では、この北大阪健康医療都市(「健都」)において平成30年(2018)を目途に完成予定である国立循環器病研究センター及び市立吹田市民病院の移転を控え、吹田市「健康・医療のまちづくり」基本方針[平成26年(2014)5月]を策定し、循環器病予防を中心とした北大阪健康医療都市ならではの健康・医療のまちづくりを進めている。更に、当地では来訪者に健康に関する行動変容を促す駅前複合商業施設、企業や大学の研究機関・サテライトオフィス等が集積する健都イノベーションパーク、防災機能に加え健康増進機能を有する公園等の整備を進めてもいる。

こうしたまちづくりの動きを踏まえ、平成27年(2015)9月、緑のふれあい交流創生ゾーンの土地(東側約4,000m<sup>2</sup>)を吹田市が取得し、高齢者向けウェルネス住宅(「健都2街区高齢者向けウェルネス住宅」)を整備する方針を打ち出し、パナホーム株式会社がその建設・運営等を行うこととなった。

パナホーム株式会社から文化財保護法第93条による発掘届の届出を受けた吹田市教育委員会は、平成29年(2017)8月30日付で大阪府教育委員会教育長に発掘調査の協力依頼を出した。吹田市教育委員会からの協力依頼に対し、大阪府教育委員会教育長は平成29年(2017)9月4日付で公益財团法人大阪府文化財センターが協力して実施する旨の回答を出した。

そうした経緯の中、本調査は、平成29年(2017)9月11日に締結された吹田市教育委員会・吹田市・パナホーム株式会社・安西工業株式会社・公益財團法人大阪府文化財センターの5者による協定の下、同年9月29日に安西工業株式会社と当センターの間で「北大阪健康医療都市(健都)2街区高齢者向けウェルネス住宅整備・運営事業に伴う吹田操車場遺跡発掘調査」として委託契約を結び、実施することになった。

現地調査は、平成29年(2017)10月2日から同年12月28日まで実施した。調査は、発生土の仮置き場の関係上、調査地を東西に2分割して行った。10月3日より西半の調査区(西区)の機械掘削を開始し、順次調査を行った。西区の調査完了後、埋め戻しを行い、11月13日から東区の機械掘削に取り掛かった。東区では調査途中で、掘削発生土の仮置き場が確保できない状況となり、東区の西側約3分の1の範囲について、先に調査を完了させて、発生土の置場を確保することとなった。東区では広大な流路を検出し、図化作業の効率化を図るために、12月20日にラジコンヘリコプターを用いた空中写真測量を行った。すべての調査を終え、12月25日に発掘調査を完了した。調査面積は2,401m<sup>2</sup>である。

調査時には、吹田市教育委員会文化財保護課及び大阪府教育庁の確認・指導を受けた。また、調査が完了した時点においては、各調査区で吹田市教育委員会文化財保護課の現地立会を受け、最終確認を得た後、埋め戻しをしている。

また、現地調査中には遺物洗浄や図面整理などの基礎整理作業も併せて行った。

現地における発掘調査終了後は、平成30年(2018)1月8日より報告書作成に向けての整理作業に入り、同年3月30日まで作業を行った。そして、同年6月29日の本報告書の刊行をもって業務を完了した。

#### 発掘調査日誌抄録

10月2日(月)	西区	降雨のため現地作業中止	11月22日(水)	東区	機械掘削、平面図作成
10月3日(火)	西区	機械掘削	11月24日(金)	東区	機械掘削、平面精査、粘土層掘削、平面図作成
10月4日(水)	西区	機械掘削	11月27日(月)	東区	機械掘削、黒色粘土層掘削、平面精査、遺構検出
10月5日(木)	西区	機械掘削	11月28日(火)	東区	機械掘削、黒色粘土層掘削、平面精査、平面図作成
10月6日(金)	西区	降雨のため現地作業中止	11月29日(水)	東区	黒色粘土層・砂層掘削、南壁断面精査・分層・写真撮影、断面図作成
10月10日(火)	西区	機械掘削	11月30日(木)	東区	9流路調査
10月11日(水)	西区	機械掘削、平面図作成	12月1日(金)	東区	9流路調査、7溝調査、10溝調査、遺構断面写真撮影、断面図作成、全景写真撮影
10月12日(木)	西区	機械掘削、平面図作成			吹田市教育委員会立会
10月13日(金)	西区	機械掘削、法面整形	12月4日(月)	東区	9流路調査、法面精査・分層
10月16日(月)	西区	降雨のため現地作業中止	12月5日(火)	東区	9流路調査、東壁断面精査・分層、写真撮影、断面図作成
10月17日(火)	西区	機械掘削	12月6日(水)	東区	9流路調査、東壁断面実測
10月18日(水)	西区	機械掘削、平面図作成、レベル測量	12月7日(木)	東区	9流路調査、南壁断面分層・写真撮影
10月19日(木)	西区	降雨のため現地作業中止	12月8日(金)	東区	9流路調査、遺物出土状況写真撮影
10月20日(金)	西区	機械掘削	12月11日(月)	東区	9流路調査、南壁断面図作成
10月23日(月)	西区	台風のため現地作業中止	12月12日(火)	東区	9流路調査、南壁断面図作成
10月24日(火)	西区	遺構面精査、法面整形、棍乱整形	12月13日(水)	東区	9流路調査、南壁断面図作成
10月25日(水)	西区	南壁断面精査・写真撮影・分層、断面図作成、遺構調査、機械掘削	12月14日(木)	東区	9流路調査、南壁断面図作成・土色注記、遺物出土状況写真撮影
10月26日(木)	西区	遺構調査、南壁断面図作成	12月15日(金)	東区	9流路調査、南壁断面図作成
10月27日(金)	西区	遺構調査、遺構平面図作成、平面図作成、東壁断面写真撮影・分層	12月18日(月)	東区	空測に向けての掃除・精査
10月30日(月)	西区	6土坑調査・遺物出土状況写真撮影、遺構面精査、東壁断面図作成	12月19日(火)	東区	空測に向けての掃除・写真撮影
10月31日(火)	西区	遺構調査、平板測量	12月20日(水)	東区	全景写真撮影、空中写真測量、吹田市教育委員会立会
11月1日(水)	西区	東壁断面図土色注記、レベル測量	12月21日(木)	東区	埋め戻し、基礎整理事業
11月2日(木)	西区	全景写真撮影、吹田市教育委員会立会、西区調査完了	12月22日(金)	東区	埋め戻し、基礎整理事業
11月6日(月)	西区	埋め戻し、池部分深掘り、6土坑埋土の洗浄	12月25日(月)	東区	埋め戻し、高まり部分掘削・確認、壁面の土器取り上げ、東区調査完了
11月7日(火)	西区	埋め戻し、6土坑埋土の洗浄	12月26日(火)	東区	埋め戻し、基礎整理事業
11月8日(水)	西区	埋め戻し、6土坑埋土の洗浄	12月27日(水)	東区	埋め戻し、基礎整理事業
11月9日(木)	西区	埋め戻し	12月28日(木)	東区	埋め戻し、基礎整理事業
11月10日(金)	西区	埋め戻し			
11月13日(月)	東区	機械掘削開始			
11月14日(火)	東区	機械掘削			
11月15日(水)	東区	機械掘削			
11月16日(木)	東区	機械掘削、平面図作成、レベル測量			
11月17日(金)	東区	機械掘削			
11月20日(月)	東区	機械掘削、人力掘削			
11月21日(火)	東区	機械掘削、平面精査			



写真1 現地調査風景

第2章 遺跡の位置と環境

## 第1節 位置・地理的環境

吹田操車場遺跡は、大阪府北部、淀川北岸の吹田市所在の遺跡である(図1)。吹田操車場遺跡は吹田市岸部新町・片山町・芝田町・岸部中町地内に位置する。JR東海道線吹田駅から岸辺・千里丘駅間にかけて、かつて「東洋一の操車場」と称され大正12年(1923)に操業を開始し、昭和59年(1984)にその役割を終えた旧国鉄吹田操車場(現:吹田貨物ターミナル駅他)を中心に広がる遺跡である(図3)。旧吹田操車場内を南東に流下する正雀川が市境にあたり、吹田市側が吹田操車場遺跡、摂津市側が明和池遺跡として扱われる。

当地は、千里丘陵と安威川・淀川に挟まれた平野部にある。千里丘陵は、第三紀末鮮新世～第四紀更新世中期に形成された「大阪群層」とよばれる地層の模式地となった丘陵として名高い。歴史的には、後述するように、古墳時代後期に千里古窯跡群が形成されたことで有名である。また淀川は、大阪平野を北東から南西へ流れ、大阪湾へと注ぐ一級河川であり、様々な歴史の舞台として登場する。

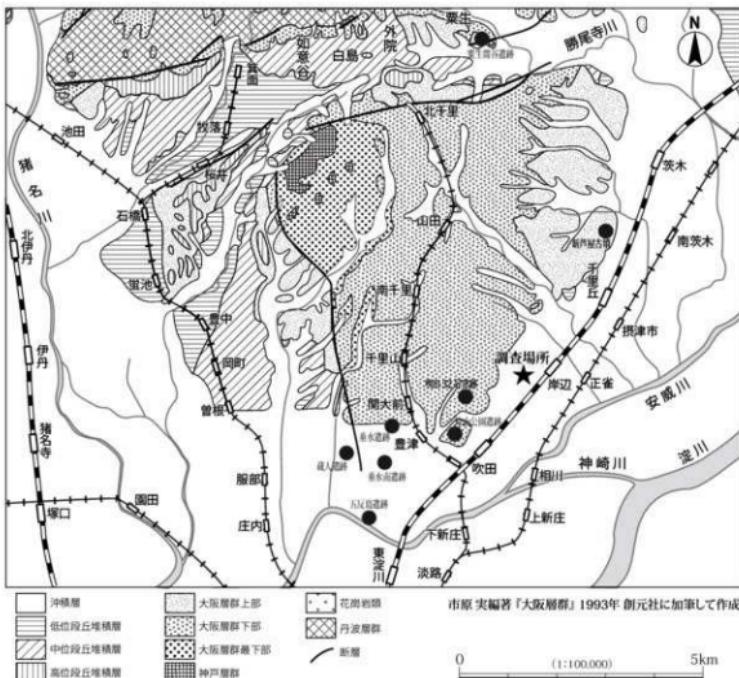


図2 周辺の地質

吹田市域の大半は、上述の大坂層群の隆起によって形成されたとされる千里丘陵で占められており、吹田市南部の遺跡が立地する場所は沖積層に分類される地質にあたる(図2)。千里丘陵の周辺地域には、大阪層群を不整合に覆って、高位・中位・低位段丘堆積層が分布している箇所が見られるが、土地条件図によれば吹田市岸部付近にも中位段丘の形成が認められる。

両市域には、正雀川や山田川などの千里丘陵に源を発し、安威川や神崎川に注ぐ河川が存在するが、いずれも短流で水量が豊富でなかったこともあり、特に吹田市側では古くから水を確保するための溜池が地形に即して築かれている。これまでの吹田操車場遺跡の調査においても、溜池状構造を確認しておりこれを首肯させる。

市の立地する場所は水運が利用し易く交通が利便であること等から、どの時代を見ても重要な遺跡が形成されている。以下に、周辺の主要遺跡を時代順に概観しておく。

## 第2節 歴史的環境

吹田操車場遺跡及びその周辺の遺跡について、今までの知見を時代ごとに概観してみたい。

### (1) 旧石器時代

千里丘陵末端に位置する吉志部遺跡や吉志部瓦窯下層遺跡で石器製作址や礫群が確認されている。出土遺物にはサヌカイト製のナイフ形石器・搔器・削器・彫器、チャート製ナイフ形石器等が見られる。石材としてサヌカイトが一般的に用いられる近畿地方において、チャート製石器の存在は珍しく、箕面市所在の粟生間谷遺跡の旧石器資料とともに、サヌカイト原産地から遠く離れた遺跡の様相として注目される。また、生活痕跡は確認されていないが、沖積地に位置する目依遺跡や高城遺跡でもナイフ形石器が出土している。これまでの吹田操車場遺跡の調査でも、旧石器が数点出土している。

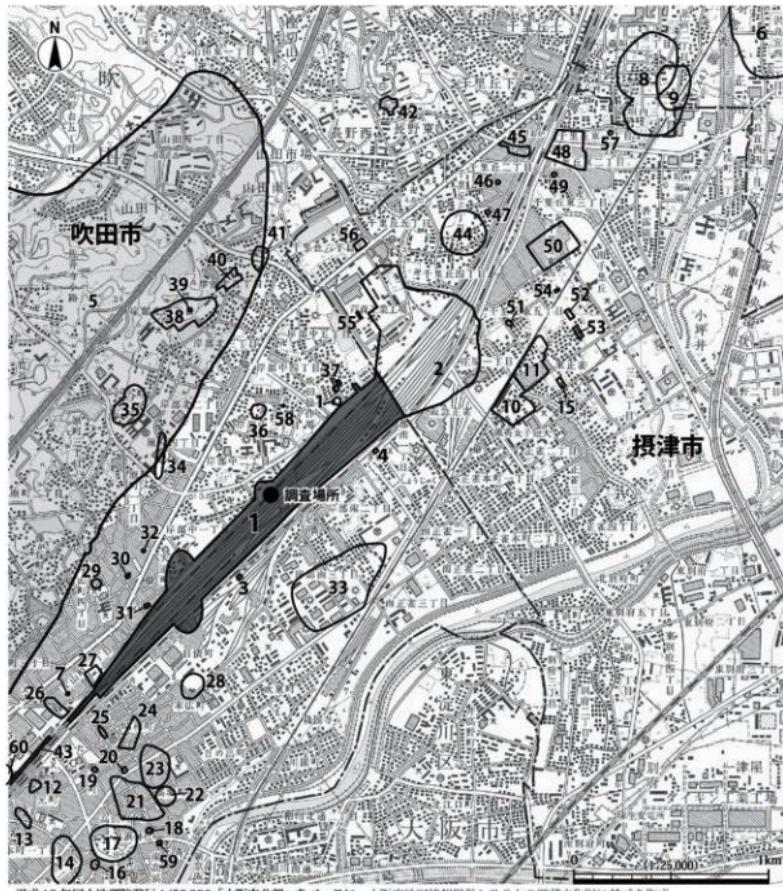
### (2) 繩文時代

中ノ坪遺跡で草創期の所産と見られるチャート製有舌尖頭器が、吉志部遺跡ではサヌカイト製有舌尖頭器が、高浜遺跡で中期前半の船元式土器が、七尾瓦窯下層遺跡で晚期後半の船橋式土器が、目依遺跡では長原式土器が確認されている。摂津市明和池遺跡では後期の中津式土器や晚期の長原式土器が出土しており、吹田操車場遺跡でも晚期の長原式土器が出土している。

総体的に縄文時代の遺構・遺物の発見例は他の時代に比して少ない。今後の調査に期待したい部分である。なお、先述した吉志部遺跡では有舌尖頭器を含めて8点の尖頭器が集中的に出土しており、全国的にも稀有な例と言える。これまでの吹田操車場遺跡の調査でも、有舌尖頭器が数点出土していることは、注目すべき成果と言える。

### (3) 弥生時代

弥生時代に入ると大幅に遺構・遺物の検出は増加する。五反島遺跡では前期の土器(壺・壺・鉢・高杯等)が出土している。丘陵上に位置する垂水遺跡では中期～後期の集落跡が確認されている。特に後期に栄えたようで、竪穴建物や掘立柱建物が検出された。出土遺物には、近江や東海、四国、山陰といった外来的土器が多く見られ、他地域との交流が盛んであったことが窺える。また、垂水遺跡直下の低地に位置する垂水南遺跡でも弥生時代の土器が多量に出土していることから、両者の関係が注目される。七尾東遺跡では中期の竪穴建物や掘立柱建物が検出されている。竪穴建物内からは土器の他、石庖丁や石鎌等も出土している。近年、吹田操車場遺跡の南東側において中ノ坪遺跡の大規模調査が行われ、前



平成12年国土地理院発行1/50,000「大阪東北部」をベースに、大阪府地図情報提供システムの埋蔵文化財に基づき作成

1. 吹田操車場道路	13. 浜の堂道路	25. 昭和町道路B地点	37. 岸部東道路	49. 千里丘東3丁目所在道路
2. 明和池道路	14. 都呂須道路	26. 片山道路	38. 吉志部瓦窯跡	50. 千里丘東4丁目道路
3. 吹田操車場道路B地点	15. 東正雀第2地点	27. 片山荒池道路	39. 吉志部1号墳	51. 庄屋1丁目所在道路
4. 吹田操車場道路C地点	16. 宮之前道路	28. 目依道路	40. 七尾瓦窯跡	52. 庄屋2丁目所在道路
5. 吹田須器窯跡群	17. 高浜道路	29. 円塚古墳	41. 七尾東道路	53. 東正雀所在道路
6. 東奈良遺跡	18. 神垣町道路	30. 片山芝田道路	42. 似神寺山道路	54. 千里丘東4丁目所在道路
7. 片山前道路	19. 朝日町道路	31. 天道道路	43. 西の庄東道路	55. 千里丘7丁目所在道路
8. 常業寺跡	20. 昭和町道路	32. 片山芝田道路B地点	44. 蜂前寺跡	56. 千里丘6丁目所在道路
9. 三宅城跡	21. 高城B道路	33. 中ノ坪道路	45. 千里丘道路	57. 千里丘東1丁目道路
10. 正雀1丁目道路	22. 吹田城跡指定地	34. 原東道路	46. 千里丘2丁目所在道路	58. 岸部中道路B地点
11. 東正雀道路	23. 高城道路	35. 吉志部道路	47. 千里丘3丁目所在道路	59. 神境町道路B地点
12. 元町道路	24. 高堀道路	36. 岸部中道路	48. 千里丘2丁目道路	60. 吹田城跡

図3 周辺の遺跡分布

期末～中期初頭、中期後葉～後期初頭頃の大きく2時期にまとまる遺構・遺物が多数検出された。また、西の庄東遺跡がある吹田砂堆上に位置する都呂須遺跡や高浜遺跡でも弥生時代の遺物が確認されており、次第に様相が明らかになるものと思われる。また、摂津市明和池遺跡では、流路沿いに後期の集落が見つかっており、鋳造関連遺物が出土し、青銅器の製作が行われていた等の重要な知見が得られている。

#### (4) 古墳時代

古墳時代には垂水南遺跡の微高地上で竪穴建物や掘立柱建物が検出され、その集落周辺では水田や灌漑用水路が確認されている。出土遺物も多岐にわたり、多量の須恵器や土師器の他に韓式系土器や製塙土器、木製農具、木鐵、勾玉や管玉等が見られる。出土土器の中には、瀬戸内西部から南関東地域のものがあり、広範な地域との交流を窺わせている。さらに、鍛冶関連遺物(羽口・鉄滓・砥石)や遺構も確認されており、鉄器生産を行っていたことが判明している。初期須恵器や韓式系土器は垂水遺跡や五反島遺跡でも出土しており、渡来系の人々の存在が注目される。また垂水遺跡では、溶解途中の仿製鏡(方格規矩鏡)が出土しており、鋳造関連の施設があったと想定される。この資料は古墳時代の鋳造技術復元に重要な示唆を与えてくれるものである。

吹田市域で知られる古墳は10基ほどで、周辺地域と比べると少ない。これは、各地で古墳が多数築造される時期に、市内にある千里丘陵が大規模な須恵器生産地として利用されていたため、古墳を築造し難い環境にあったことが一因と見られる。また、高度成長期における千里丘陵一帯の大規模開発による破壊も見過ごせない要因であろう。

吉志部神社境内の吉志部1号墳は7世紀初めに築造されたもので、市内唯一の現存する石室である。石室内から、須恵器の蓋杯・長頸壺・ガラス玉・刀子・鐵等が出土している。新芦屋古墳は宅地造成中に発見されたため古墳の外形は既に失していたが、組合式石棺を納めた木室墳であることが明らかになっている。木室内からは須恵器の高杯・杯・器台・土師器・鉄地金銅張りの馬具一式が、石棺内からは人骨とともに玉・耳環・直刀が出土している。なお、本古墳は石棺を納めた木室墳としては全国唯一の存在である。また、片山公園遺跡では大量の埴輪片が見つかっており、操車場を造成する際に削られた丘陵の尾根上に古墳群が形成されていた可能性がある。片山荒池遺跡でも古墳時代中期中葉の円筒埴輪が出土しており、吹田操車場遺跡直にも古墳が築造されていたと推定される。

千里丘陵一帯では、須恵器窯跡が数多く発見されている。その中で最古のものは吹田32号窯跡(ST32)である。窯内部から錫歯文や斜格子文等の文様が施された須恵器が出土しており、5世紀前半の初期段階の須恵器窯であることが明らかとなった。その後、須恵器窯は6世紀中頃に最盛期を迎え、8世紀前半には完全に生産を停止している。なお、吹田操車場遺跡・片山荒池遺跡では6世紀～7世紀代に掘削された粘土採掘用の群集土坑が見られ、千里窯跡群との関係が示唆されている。

#### (5) 古代・中世

最盛期は過ぎたものの前代に引き続き千里丘陵一帯で窯業が行われていた。8世紀初頭には七尾瓦窯跡が操業され、後期難波宮で葺かれた瓦が焼かれている。また、8世紀末操業の吉志部瓦窯では平安京へ供給する瓦の生産が行われたが、短期間のうちに操業を終え、操業の場は京都の西賀茂瓦窯跡・角社瓦窯跡へと移されている。

文献によると平安時代には、春日領や東寺領の莊園が営まれるようになり、鎌倉時代にかけて一層進展する。垂水南遺跡では、東寺領垂水庄との関係が指摘される「垂庄」や「中庄」と書かれた墨書き土器が出

土している。また、戸跡は垂水庄戸人村との関連が指摘されており、掘立柱建物や鍛冶工房、水田や畠などが見つかっている。

吹田砂堆上に位置する高城B遺跡や高城遺跡、高畠遺跡等では短期間に営まれた平安時代の集落が確認され、さらに高城B遺跡では14世紀前半に掘削されたと見られる群集土坑が見つかっている。また、高城町辺りや西の庄町のアサヒビール吹田工場付近は14~16世紀に営まれた吹田城址推定地とされているが、現在のところ城跡と断定出来る資料は確認されていない。

#### (6) 近世以降

近世以降の報告例は少ないが、垂水遺跡で明石焼陶製土鍋、明石焼或いは堺焼擂鉢、土人形などの出土が報告されており、片山荒池遺跡では溜池が検出されている。

明治に入ると明治7年(1874)大阪・神戸間に鉄道が敷設され、明治22年(1889)までに大阪・敦賀間が官営鉄道として順次開通した。その後、関西圏の鉄道網が整備され、貨物輸送も発展していく。その中で、貨物輸送の向上と円滑化を図るため、「東洋一の操車場」と謳われた吹田操車場の造成が大正12年(1923)から開始された。また、吹田市では明治23年(1890)に建築が開始された煉瓦造りの大坂麦酒吹田村醸造所(現アサヒビール吹田工場)の存在が近代化への大きな転換となっている。

なお、これまでの旧吹田操車場内における発掘調査において、陶磁器、汽車土瓶(蓋や猪口も含む)、牛乳瓶、ビール瓶、木製弁当箱の蓋、ダニエル電池素焼き容器、荷札木筒、煉瓦等の多種多様な近代資料が採取されている。こうした資料は、鉄道関連施設や大阪麦酒吹田村醸造所で使用されたものと思われ、現在各地で脚光を浴びる近代遺産に関する資料として貴重なものと言える。

### 第3節 既往調査区の成果

これまでの吹田操車場遺跡に関する調査を一覧表にしてまとめた(表1)。その中から、特に今次調査区の周辺を中心に、既往調査の成果を簡単にまとめておく。

平成12年(2000)、吹田信号場基盤整備工事による貨物駅舎及び倉庫等の建設に際して、開発予定期の発掘調査を実施することとなった。A地区では古墳時代前期の大溝、平安時代後期の掘立柱建物や条里型水田が検出されている(図4-00:A)。B地区では古代末から中世にかけての複数の遺構面を検出し、畦畔等が確認され耕作地であったことが明らかとなった(図4-00:B)(大文セ2001)。

この調査と並行し、吹田操車場の南側に位置する貨車区の改良工事を行うこととなり、建替えの対象となった貨車庫の確認調査を大阪府教育委員会文化財保護課が実施した。その結果、新たな遺跡の発見となり、吹田操車場遺跡B地点と命名された。吹田操車場遺跡B地点として調査を行ったC地区では谷地形を検出し、埋土最下層から鬼界アカホヤ火山灰が検出された。このことから谷の形成が7300年前以前であることが判明している(大文セ2001)。

平成13年(2001)には吹田市教育委員会によって、吹田市営岸部中住宅建替工事に伴う事前調査が実施され、8箇所の試掘調査がなされた。平成14年(2002)には拡大調査が行われ、北西から東南方向の谷状地形や流路群が検出されている。主な出土遺物には中世遺物と弥生土器等があり、特に東海系の弥生土器が比較的多く出土していることは注目される(図4-市教委2002)(吹田市2004)。

平成18・19年(2006・2007)には吹田信号場駅基盤整備工事に伴い、調整池が造成されるC1・C2地区、C3・C4地区、C5・C6地区の調査が実施された。その結果、C1・C2地区からは古墳時代後半か

ら飛鳥・奈良時代にかけての群集土坑、飛鳥・奈良時代及び平安時代の掘立柱建物が検出された(図4 06-1 : C1・C2)。主な出土遺物に、土坑出土の円面鏡、包含層出土の墨書き器、縁軸・灰釉陶器等がある。C3・C4地区、C5・C6地区では、古墳時代に流路であった場所が、古代には湿地状になり、古代末に新たな流路と落込みが形成され、その後盛土が施され平坦化するという土地の利用変遷を考える上で重要な成果があった(図4 06-1 : C3・C4・C5・C6)。なお、古墳時代の流路からは山陰系の土師器がまとめて出土しており、地域交流を考える上で重要な資料として注目される(図4 06-1 : C3・C4)(大文セ2008)。さらに付言すれば、この流路は前述の吹田市教育委員会による調査で検出されたものと同一の流路である可能性が高く、今次調査区でも検出される蓋然性が高いものであった。

平成19・20年(2007・2008)には吹田信号場駅基盤整備工事に伴い、調整池造成4箇所(C7~C10)他の調査が実施された。特に、第2地区とされるC8において、掘立柱建物で構成される10世紀頃の集落が検出され、掘立柱建物3棟、柵列、井戸が見つかっている(図4 07-1-2)。他の地点では弥生時代の土坑、古墳時代の溝や井戸等を確認しており、中世になると広範に耕地が広がることが明らかになった。主な出土遺物には七尾瓦窯・吉志部瓦窯産の軒丸瓦、陶棺、越州窯系青磁碗、縁軸・灰釉陶

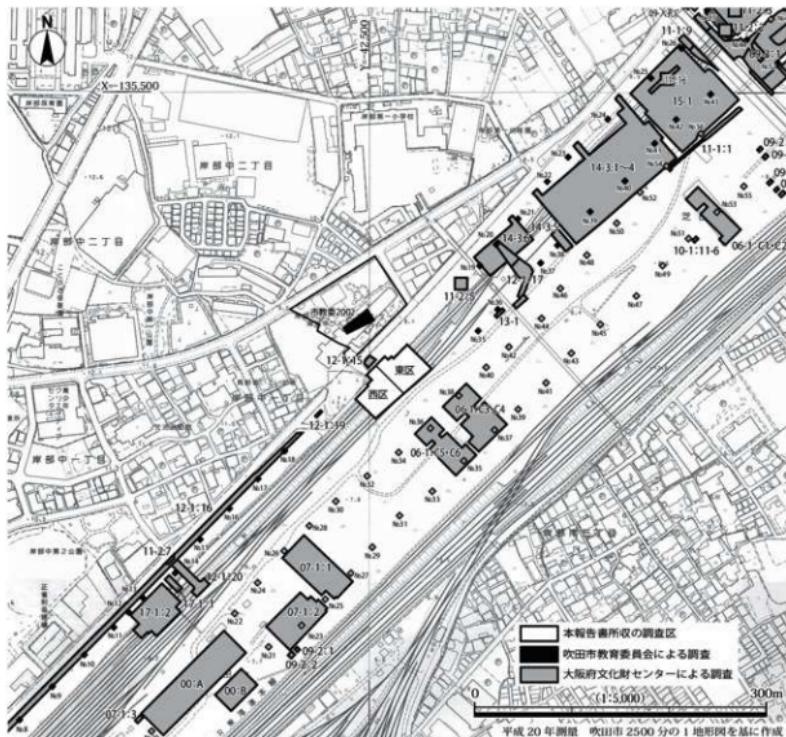


図4 既往調査及び今次調査位置

表1 吹田操車場遺跡調査一覧

調査原因	所在地	調査機関(大文七調査名)	調査期間	主な成果	備考	文献
1 吹田操車場における改良工事	岸部中1丁目付近	(財)大阪府文化財調査研究センター	1967			吹田市 1981
2 JR梅山貨物駅の機能移転	吹田市芝田町	(財)大阪府文化財調査研究センター	1998.10~12	61箇所のトレンチ調査 (No.)	大文七 (No.)	大文七 1999
3 吹田信号場駅基盤整備工事	吹田市芝田町	(財)大阪府文化財調査研究センター (吹田操車場遺跡その2)	2000.3~9	古墳時代から古代にかけての直線的な土塁を検出。平安時代の孤立柱建物と並溝型水道を検出	倉庫部分をA地区(00:A)、駅舎部分をB地区として調査(00:B)	大文七 2001
4 吹田地区復元区改良工事	吹田市平野町	(財)大阪府文化財調査研究センター (吹田操車場遺跡その3)	2000.9~2001.3	谷丘地帯内から鬼怒アカボヤ火山灰を検出	旧設車場3号部分をC地区とし、新規発見の遺跡として周知。吹田操車場遺跡B地点	大文七 2001
5 市営住宅の建設工事	吹田市岸部中1丁目地内	吹田市教育委員会	2001.6 2002.9~11	谷丘地帯と沿路帯の検出。中世土器と併せて土器を検出。生糸土器(中世後半~後期)にかけて、東海系の土器が一定量含まれる	第1次調査	吹田市 2004
6 吹田信号場駅基盤整備工事	吹田市芝田町地内	(財)大阪府文化財センター (吹田操車場遺跡06-1)	2006.8~2007.6	都築1号約300mと付随する建物を検出。後期波波瓦を覆瓦の出土。自然地塊から外系來の古式刀器を出土	6箇所の調整池とそれを結ぶ導水管部分の調査	大文七 2008
7 吹田信号場駅基盤整備工事	吹田市芝田町地内	(財)大阪府文化財センター (吹田操車場遺跡07-1)	2007.5~2008.11	古墳以前の直線的な溝(道路側溝)、平安時代の孤立柱建物、櫛溝などを検出し当時の集落を検出	調整池4箇所、防水水槽4箇所、導水管部分を調査	大文七 2010
8 吹田操車場跡地地区(吹田市)の整備事業(操車場跡地内のまちづくり用地にかかる調査)	吹田市芝田町地内	吹田市教育委員会	2007.12~2008.7	■ 54・55トレンチ調査片出土	第2次調査 59箇所のトレンチ調査 ■(No.)	吹田市 2008
9 個人住宅	吹田市天道町2195-11	吹田市教育委員会	2009.1			吹田市 2010a
10 下水道設置工事の立坑・坑・污水構設置	吹田市芝田町地内	吹田市教育委員会	2009.1 2009.4~6	PSD19トレンチ調査片出土(第2次調査のものと接合)	第3次調査(PSD10・17・19、人丸C・E)	吹田市 2010b
11 吹田信号場駅基盤整備工事(貨物専用道路)	吹田市片山町1丁目地内	(財)大阪府文化財センター (吹田操車場遺跡09-1)	2009.4~2010.7	平安時代の木棺墓があり		大文七 2011b
12 吹田信号場駅基盤整備工事	吹田市芝田町地内	(財)大阪府文化財センター (吹田操車場遺跡09-2)	2009.5~7	中世の孤立柱建物を検出	JR第2・3・3戦丘通路部分 付替え(オフスマルチ方式) 部分の調査(09-2・1・2)	大文七 2010
13 吹田信号場駅基盤整備工事	吹田市芝田町地内	(財)大阪府文化財センター (吹田操車場遺跡09-2)	2009.7~2010.3	都築1号を検出。平安時代の孤立柱建物を検出。生糸時代の遺跡あり	南北自由通路部分ほか各施設部分を調査	大文七 2011a
14 下水道設置工事の立坑	吹田市芝田町地内	吹田市教育委員会	2009.9~10	古墳時代と平安時代の遺物が出土	第4次調査 約90m	吹田市 2010b
15 吹田操車場跡地土地区画整理事業	吹田市芝田町地内	(財)大阪府文化財センター (吹田操車場遺跡09-3~10-2+11-1~12-1)	2009.10~2010.3 2010.6~2011.3 2011.4~2012.3 2012.4~2013.3	券生時代以前からの谷を検出。古墳時代の群集土器が数あり。古式の孤立柱建物を検出。中世の井戸が検出		大文七 2014
16 吹田信号場駅基盤整備工事	吹田市芝田町地内	(財)大阪府文化財センター (吹田操車場遺跡10-1)	2010.4~8	溝から生糸時代後期の土器がまとまって出土	職員通路ほか部分の調査	大文七 2011a
17 吹田信号場駅基盤整備工事	吹田市岸部中1丁目	(財)大阪府文化財センター (吹田操車場遺跡10-1)	2010.4~8	平安時代の土坑墓を検出。土壌定形品である7世紀代の土坑、溝あり	新規発見の遺跡として周知 吹田操車場遺跡C地点	大文七 2011a
18 工事(物販専用道路)	吹田市片山町1丁目	(財)大阪府文化財センター (吹田操車場遺跡10-3)	2010.8~2011.2	6世紀代の直線的な区画溝あり		大文七 2011c
19 個人住宅	吹田市片山町1-2262 -19	吹田市教育委員会	2010.11	土壌部・須恵器片出土		吹田市 2011
20 吹田信号場駅基盤整備工事(貨物専用道路)	吹田市芝田町地内	(公財)大阪府文化財センター (吹田操車場遺跡11-2)	2011.7~9	都築1号、7世紀後半の区画溝。 含苞から籬土器?出土	汚染土堆に伴う調査(7箇所のトレンチ)	大文七 2012
21 吹田信号場駅基盤整備工事(墓地造成工事)	吹田市芝田町地内	(公財)大阪府文化財センター (吹田操車場遺跡13-1)	2013.5	飛鳥時代の遺物を出土。	基盤層がラミナ・織著な砂層	大文七 2013
22 吹田市新市民病院移転建替事業	吹田市芝田町地内	(公財)大阪府文化財センター (吹田操車場遺跡14-3)	2014.10~2015.4	券生時代に形成された谷の周囲に鐵高地があり、その鐵高地で古代の孤立柱建物群を検出。木棺墓や土塼墓もあり		大文七 2015
23 国立循環器病研究所センター・建替整備事業	吹田市芝田町地内	(公財)大阪府文化財センター (吹田操車場遺跡14-1)	2014.3~2015.3	古墳時代後期の群集土器900基以上。古代の孤立柱建物23棟を検出。小型圓窓菊瓣紋・石製造方陣特有すべき遺物が出土。		大文七 2016a
24 吹田操車場跡地開発	吹田市岸部新町	(公財)大阪府文化財センター (吹田操車場遺跡15-1)	2015.8~2016.3	古墳時代~飛鳥時代頃の群集土器280件以上。平安時代の孤立柱建物10棟を検出		大文七 2016b
25 国立循環器病研究所センター・建替整備事業	吹田市岸部新町	(公財)大阪府文化財センター (吹田操車場遺跡16-1)	2016.5~11	古墳時代後期以降の群集土器約470基		大文七 2017b
26 (仮称)健闘ライブラリー整備事業	吹田市岸部新町	(公財)大阪府文化財センター (吹田操車場遺跡17-2)	2017.7~10	平安時代に属する孤立柱建物4種を検出。飛鳥~奈良時代の壇上土坑		大文七 2018
27 北大阪健康医療都市(健都)2街区高齢者向けウェルネス住宅整備・運営事業	吹田市岸部新町	(公財)大阪府文化財センター (吹田操車場遺跡17-2)	2017.10~12			本書

器等がある。特に越州窯系青磁は、大阪府下でも出土遺跡数・出土点数ともに極めて少ない注目すべき資料である(大文セ2010)。

平成19年(2007)には、操車場跡地内のまちづくり用地の確認調査が59箇所のトレンチを設けて行われた(図4 ■Na)。その結果、谷状地形の他、中世以前の可能性がある農耕関連溝や、飛鳥時代の建物跡、平安時代のピット、古墳時代後期の大型土坑のまとまり等が検出された。遺物では国府型ナイフ形石器、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての焼成不良須恵器や飛鳥時代の陶硯片等が出土している(吹田市教育委員会2008)。

平成21~24年(2009~2012)には、吹田操車場跡地の土地区画整理事業に伴う発掘調査によって、吹田操車場遺跡の北東側およそ3分の2を横断するようにトレンチが設けられ、縄文時代晚期から中世に至る種々の遺構・遺物が確認された。JR岸辺駅前では、弥生時代以前からの谷地形を検出し、その谷の周囲に古墳時代に属する群集土坑がおよそ470基見つかった(図4 09-3:1)。それらは、近隣の千里古窯跡群に関連した粘土探査坑の可能性が論じられた。また、西側の方では、古代から中世に至る建物や井戸が見つかり、集落の存在が示唆される成果があった(図4 12-1:16)(大文セ2014)。さらに、今次調査区の北西側の調査では、中世の大規模な溝が見つかっており、今次調査区に続く可能性があった(図4 12-1:15)(大文セ2014)。

平成26・27年(2014・2015)には、JR岸辺駅前で国立循環器病研究センター建替整備事業に伴う発掘調査が行われた。およそ2万m<sup>2</sup>という広範な調査によって、飛鳥時代から平安時代を中心とする時期の掘立柱建物が29棟見つかり、当該期の遺物も多量に出土した。また他にも、古墳時代後期以降に属する粘土探査坑と見られる群集土坑がおよそ900基検出される等、重要な成果が多くあった(大文セ2016a)。その後、追加調査が行われ、群集土坑は当地域全体で2000基を超す数になっている(大文セ2017b)。

また、同じ平成26・27年(2014・2015)には、吹田市新市民病院移転建替事業に伴う発掘調査が行われ、微高地に立地する、古代及び古代末から中世の2時期の集落が検出された(図4 14-3:1 ~4・5・6)。古代の建物群は正方位に主軸を持つもので、周囲に木棺墓や土壙墓、井戸も検出された。古代末~中世に属する建物は、古代の建物とは主軸方位を異にするものであった(大文セ2015)。

平成27・28年(2015・2016)に実施された吹田操車場跡地開発に伴う調査では、古墳時代から飛鳥時代に属する群集土坑約280基、奈良時代に属する掘立柱建物群、平安時代に属する掘立柱建物群等が見つかった(図4 15-1)。中でも平安時代に属する掘立柱建物群には、大型の四面廂付建物があり、それに付随すると思われる建物とセットで見つかったことは特筆すべき成果である(大文セ2016b)。

また、今年度、別の地点で実施された(仮称)健都ライブラリー整備事業に伴う調査では、平安時代に属する掘立柱建物が4棟見つかった(図4 17-1:1・2)。中でも、方二間に軒支柱を持つ建物は、あまり類を見ないものであり、その特殊性が目を引く建物である。また、飛鳥時代から奈良時代の遺物もまとまって出土したことから、当該期集落の存在が示唆される成果があった(大文セ2018)。

吹田操車場遺跡は広範な遺跡であり、旧石器時代から中近世に至るまで連続と成ってきた人類の活動の記録が大地に累々と刻まれていることが、これまでの調査で徐々に明らかになってきている。

## 第3章 調査の方法

### 第1節 現地調査

〔調査区〕 工程上、東西に2分割し、東区・西区として調査を行った(図6)。

〔現地調査〕 調査は、旧吹田操車場造成時やその後の区画整理によるものと考えられる盛土を機械力により除去した。様々な搅乱についても機械力により除去した。また、包含物などから明らかに新しい時期に帰属すると判明した層等を機械力にて除去し、その後、人力にて掘削した(写真1・2)。

人力による掘削は、スコップ・鏝簾等を使い、遺物包含層の掘削、遺構面の精査によって遺構を検出し、遺構面・遺構の確認及び遺物の回収に努めた。現地調査は、当センター作成マニュアル「遺跡調査基本マニュアル」2010に準拠して行った。

〔地区割〕 遺構の位置確認や遺物の取り上げに関して、世界測地系に則った平面直角座標系第VI系を基準とし、I～IVの大小4段階の地区割りを設定した(図5)。これは大阪府域全体に共通する地区割りである。第I区画は、大阪府の南西端を通るX=-192,000・Y=-88,000を起点に、府域を南北15(A～O)、東西9(0～8)区画に分割したもので、一区画が南北6km・東西8kmとなる。第II区画は、第I区画を東西・南北各4分割し、計16区画(1～16)に分けたもので、一区画は南北1.5km・東西2.0kmとなる。第III区画は、第II区画を東西20(1～20)・南北15(A～O)に分割する一辺100mの区画である。第IV区画は、第III区画をさらに東西・南北に10分割した(東西1～10・南北a～j)一辺10mの区画である。上述の方法で区画した場合、今次調査で使用する第I・II区画は「J 5-7」であり、第III区画は「5 H」「6 H」及び「5 I」「6 I」となる。地区割りの詳細は図5・6に示した。

〔記録作業〕 調査では適宜、各トレンチの平・断面の実測、レベル測量、写真撮影を行った(写真2)。実測図は平面図を100分の1、断面図を20分の1で作成した。写真媒体は35mm黑白フィルム・35mmリバーサルフィルム・6×7黑白フィルム・6×7リバーサルフィルムを使用した。また、写真台帳に使用するため、デジタルカメラによる撮影も併せて実施した。撮影にあたってはセンター所定の写しこみラベルに調査名・トレンチ名・撮影内容・撮影方向・撮影日時・撮影者を記載し、35mm黑白カメラで写し込みを行った。

出土遺物については、調査名・トレンチ名・層名・出土年月日・登録番号などを記したセンター所定のマイラーベースのラベルを添付し、トレンチ・包含層・遺構ごとに取り上げた。

なお、平面図の作成は、上述した世界測地系に則った平面直角座標系第VI系を用いている。方位は座標北を使用し、水準はすべて東京湾平均海面(T.P.)を用いた。このような現地作業における記録類は、A2判図面で29枚になる。

〔遺構番号〕 遺構の種類にかかわらず、1から通し番号で振り、遺構の種類は遺構番号の後ろに付した。「1溝」、「2土坑」、「3ピット」という具合である。

〔基礎整理作業〕 現地調査と並行して、出土遺物の洗浄・注記、出土遺物の台帳作成、平面図・断面図の図面整理などの基礎整理も行った(写真2)。遺物への注記は、マニュアルに従い、「スイタソウシャ17-2-□」(□は遺物登録番号)として各遺物に記入した。破片が小さく記入できない場合や木製品等は、登録番号がわかるよう袋にまとめ、ラベルとともに封入した。台帳作成にはファイルメーカー社の

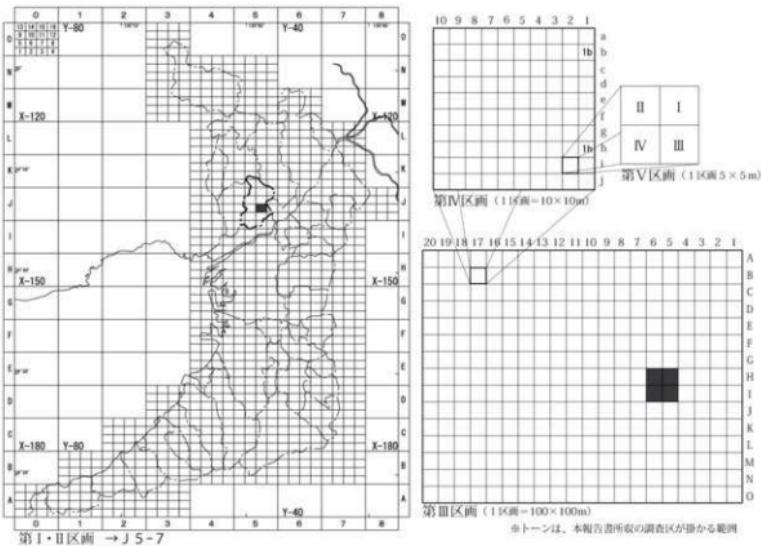


図5 地区割(1)

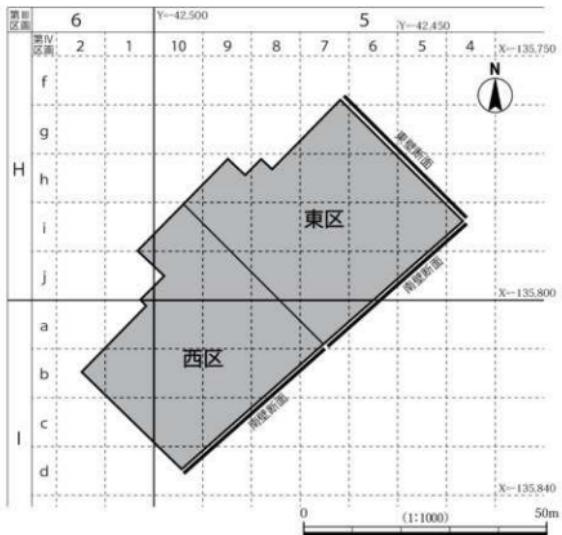


図6 地区割(2)

FileMaker Pro 8 を用いた。台帳にはデジタルカメラで撮影した写真データに加え、遺物に添付したラベルの情報及び遺物の内容などの情報を入力した。

## 第2節 整理作業

整理作業の対象となった遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、灰釉陶器、陶磁器類、瓦、木器、石器、鉄器などで、 $55 \times 35 \times 15\text{cm}$ の収納コンテナに9箱である。これらの整理作業も、当センターマニュアル『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠して行った。

出土遺物は、遺構ごと、また包含層出土遺物については、近隣の地区とも確認しながら接合作業を行い、必要に応じて石膏を用いた遺物復元作業を行った。同時に実測可能な遺物をピックアップし、ピックアップしたものは順次実測作業を行い、瓦等については拓本をとった。遺物実測数は瓦や木製品等も含め111点となつた。実測した遺物については、遺物登録台帳とは別に掲載遺物台帳とリンクした実測遺物台帳を作成した。

上記の手順で作成した遺物実測図は、スキャナーで原図を取り込み、adobe社製IllustratorCS6を用いてトレースし、必要に応じてデジタル化した拓本などのデータを貼り込み、挿図を作成した。最終的には実測した遺物のうちの110点を本書に掲載することとした。

遺構図は、原図を遺物同様の手順でデジタルトレースをし、主要遺構については、現地で作成した実測図を編集し、デジタルトレースにより挿図を作成した。報告書掲載の挿図は、遺構図・遺物実測図とともにデジタルデータによって作成した。

現地で撮影した遺構面及び個別遺構の写真に関しては、報告書に掲載するものを選別し、デジタル化作業を行つた。また、出土遺物については、報告書に掲載するものを選別し、実測作業の後、写真撮影し、デジタル化作業を行つた。遺物写真については、中部調査事務所の写真室において撮影を行つた。以上の作業と併行して報告文を作成し、編集作業を行つた。また、編集作業と併行して出土遺物は報告書掲載遺物と未掲載遺物に分類し、収納作業を行つた。併せて、現地にて作成した遺構図面や撮影した遺構写真の整理・収納を行い、これらも台帳に登録した。



写真2 現地調査及び整理作業風景

## 第4章 調査成果

### 第1節 基本層序

今次調査では、作土層や整地層、遺物包含層といった、いわゆる基本層序と呼べるような整然とした堆積状況は見られなかった。というのも、調査区のほとんどが後世の池造成や攪乱により、大きく改変を受けていたからである。

通常、吹田操車場跡地内の発掘調査を行うと、概ね層厚1～1.5m前後の黄橙色シルト～極細砂ブロック土や褐灰色細砂質シルトブロック土等を主体とする、大正時代の旧吹田操車場造営に伴う盛土層が認められるが、今次調査ではそれらが見られなかった。また、上記の盛土にパックされる形で、旧吹田操車場が造成される前の水田や畑作に伴う歴立てされた旧表土が見られるのが常であるが、それらも認められなかった。

今次調査では、盛土、池に伴う堆積土及び埋め立て土、9流路埋土、基盤層の大きく4つに分類できる層序を確認した。ここで、図7～9に示す断面図に基づき、盛土を除く3つの層についてまとめておく。

#### 池の堆積土及び埋め立て土（池の復元）

機械掘削時の所見及び断面の状況から、図10に示すような池A～Dの存在が想定された。

池Cは真砂土により埋め戻されており、その埋土を切る形で池Aの埋土が確認できた。また、池Bの埋土（図9②③⑦～⑨⑫層）を切る形で池Aの埋土が認められた。これらのことから池Aが最も新しく造られたものと判断する。状況から、操車場造成時まで機能していたものであり、池Aを埋めて操車場が造成された蓋然性が高い。池Bと池Cの重複関係や前後関係は、池Aの造成のために不明である。また、池Cについて、若干重複する位置に5溝が存在するのであるが、断面観察の結果に基づくと、池Cの埋没後に5溝が掘削されている可能性がある。5溝は図8⑧～⑩に断面があり、調査区外へ延びていくことがわかる。当溝からは、近世から近代にいたる遺物が出土している。

これとは別に、池Dの存在も想定でき、東区の大半は池Dであったと思われる。南東側と北西側が攪乱のために様相が明らかでなく、規模は不明であるが、北東側及び南東側は調査区外に続く。なお、池Dは途中で規模を縮小したようで、図8⑪～⑭層の部分が埋め戻され縮小しているようである。そして、縮小した池底に堆積した層が図7・8の④⑤層と想定できる。その後さらに規模が縮小されたようで、図7・8①～③層他により埋め戻されていることが断面観察から推定できる。そして、池Dも池Aと同様に操車場造成時に埋め立てられたものと考えられる。以上のことから、操車場造成直前には池Aと池Dが併存していた蓋然性が高い。

これらのことと検証するために、操車場造成以前に作製された地図をいくつか確認したが、当地に池が存在した表現は認められなかった。ところで、吹田操車場遺跡14-1調査(大文セ2016a)において、旧東海道線の軌道敷際に大規模な池が見つかっており、この池も操車場造成時に埋め立てられ、地図には現れない。操車場造成直前まで機能していた池が、地図には表現されないが、旧東海道線沿いにいくつかあったものと推定できる。

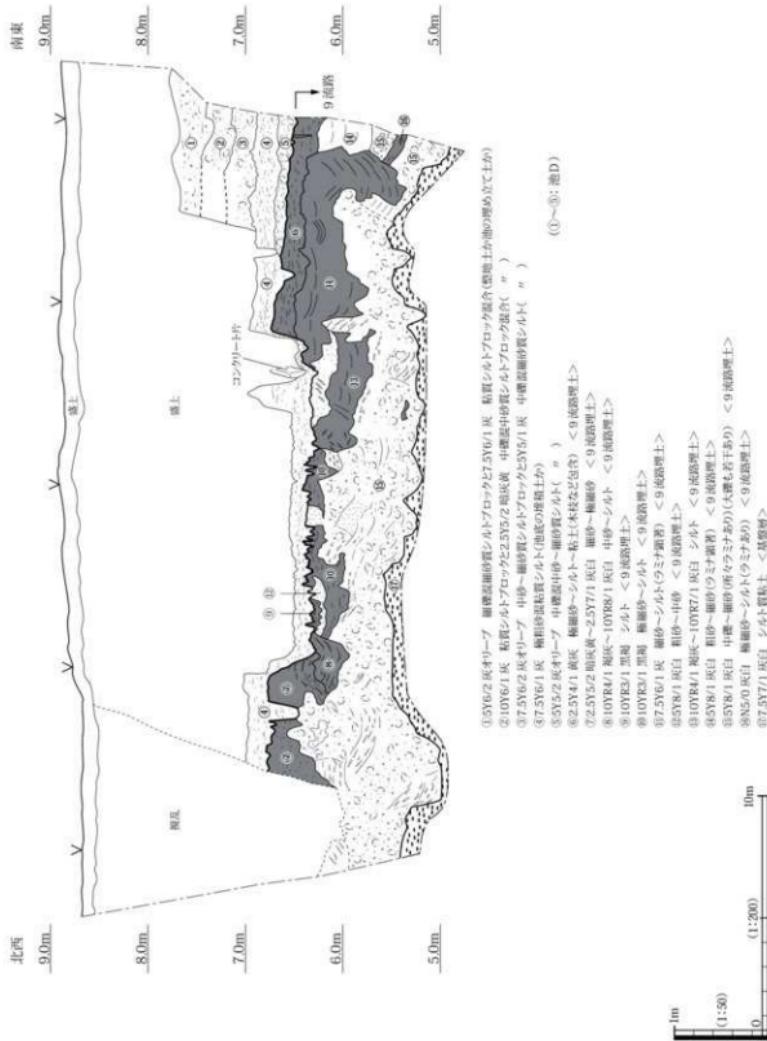


図7 東区東壁断面

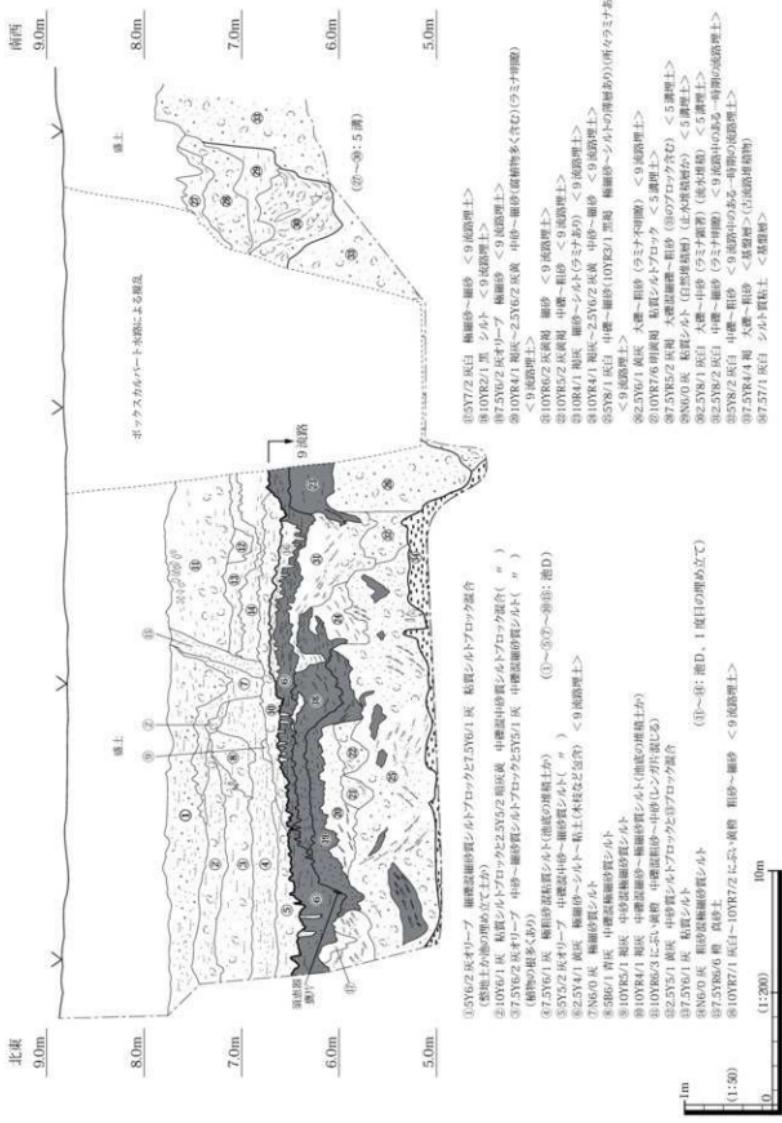


圖8 東區南崁斯面



図9 西区 南壁断面

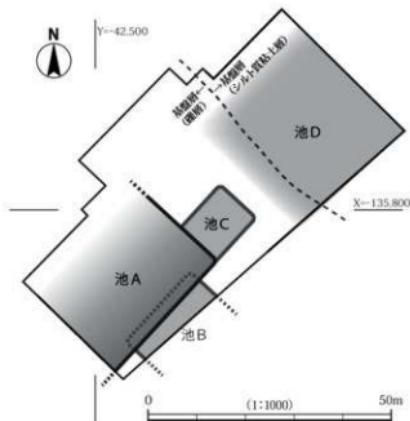


図10 池の想定

## 9流路埋土

詳細については第2節で後述するが、池の造成のために上部が削平されている蓋然性が高い。池Dの埋土及び堆積土直下がすべて9流路の埋土である。本来であれば、9流路埋没後に形成されたであろう遺構面や包含層が存在するはずであるが、そうしたものは皆無であった。

## 基盤層（旧地形の復元）

今次調査では、2種類の基盤層が検出された。一つは図7 ⑭層・図8 ⑭層としたシルト質粘土層で段丘形成層と思われる堆積層、もう一つは図8 ⑮層・図9 ⑮層とした大礫～細

砂の礫層で流路堆積物と思われる堆積層である。およその境界を図10に示しておく。

当地の地形環境について、基盤層から得られた情報を基に若干言及しておく。

現在、調査区の北西辺を北東—南西方向に通る区画街路があるが、当調査区の南西側に向かって緩やかに上り、また下るという状況で、ちょうど調査地の南西辺部分が他よりも一段高い。吹田貨物ターミナル駅ヤード部分には切土されて続かないが、馬の背状に微高地となっているのである。この微高地が何に起因するのかの手掛かりが得られた。

図8に示す⑩層と⑪層の境から南西に向かって⑪層が深く堆積している。⑪層は、⑩層を削り込んで堆積した流路堆積物である。⑪層の層厚は確認できていないが、上部は当調査地ではT.P.+8.0mぐらいまで堆積している。これらのことから、古流路が山なりに埋没したことで微高地が形成されたものと推定できる。おそらくは、千里丘陵に端を発し、安威川や淀川に向かって流れ出たものであろう。北西から南東へと流水したものと考えられる。その時期については、出土遺物が無く不詳であるが、当地において人々が活発に活動する遙か以前のことであろう。

この微高地を形成する流路堆積物を丹念に追つていけば、周辺の地形環境の復元につながるものと思われる。なお、付近の既往調査でも礫層が確認されている箇所があり(図4 11-2:5)、当調査区で検出した礫層との関係の解明が今後俟たれる。

## 第2節 遺構と遺物

今次調査では、前述したように、後世の池の造成や攪乱により、遺構面や包含層の遺存状況が良好でなく、検出した遺構は限られたものとなった。また、検出した遺構はすべて基盤層上面で検出したものとなる。以下に、概ね時代を追つて調査成果を述べていきたい。

### 9流路(図7・8・12~16、写真図版1~3・5・8~12)

東区において検出した。三方が調査区外になり、南西辺が攪乱のため全容は明らかでないが、北西—南東方向を指向する。検出した部分の規模は、幅22.5~24.5m、検出長約29mである。流路の底で標高が最も高いところは6.0m前後、最も低い部分は4.7m前後であり、当調査区内において1m前後の比高がある。この比高及び周辺の地形を考慮すれば、北西から南東方向へ流水があったと推定できる。

埋土は中礫～細砂を主体とし、検出面からの深さ1.0~2.0mを測る。所々に木葉など植物遺体の溜まりが形成され、流木が遺存している箇所もあった。流路断面の観察から、当流路が全体として機能し、ある程度埋没した後、再び流水により幅の狭い流路が幾筋か形成され、埋没したようである。

当流路の幅は攪乱及び調査区外になるため全容は不明であるが、少なくとも南西側の肩口に関しては、現代のボックスカルバート水路による攪乱部分に存していたことは確実である(図8)。

遺物が概ね4つの場所でまとめて出土しており、それを図12に示した。今次調査で検出した流路の中央部分では遺物の出土ではなく、両端にあたるA~Dの地点で遺物が出土した。出土遺物は、弥生土器、上師器、須恵器、瓦質土器、灰釉陶器、木器である。以下に、各地点で出土した遺物について報告する。なお、出土遺物はA~Dの出土地点ごとにまとめて図示している。

A地点で出土した遺物は、図13・14に示した1~42である。1~19は弥生土器である。1~3は口縁部に刻み目を持つ甕で、1は口縁直下に沈線が認められる。いずれも弥生時代前期の所産か。4は甕。

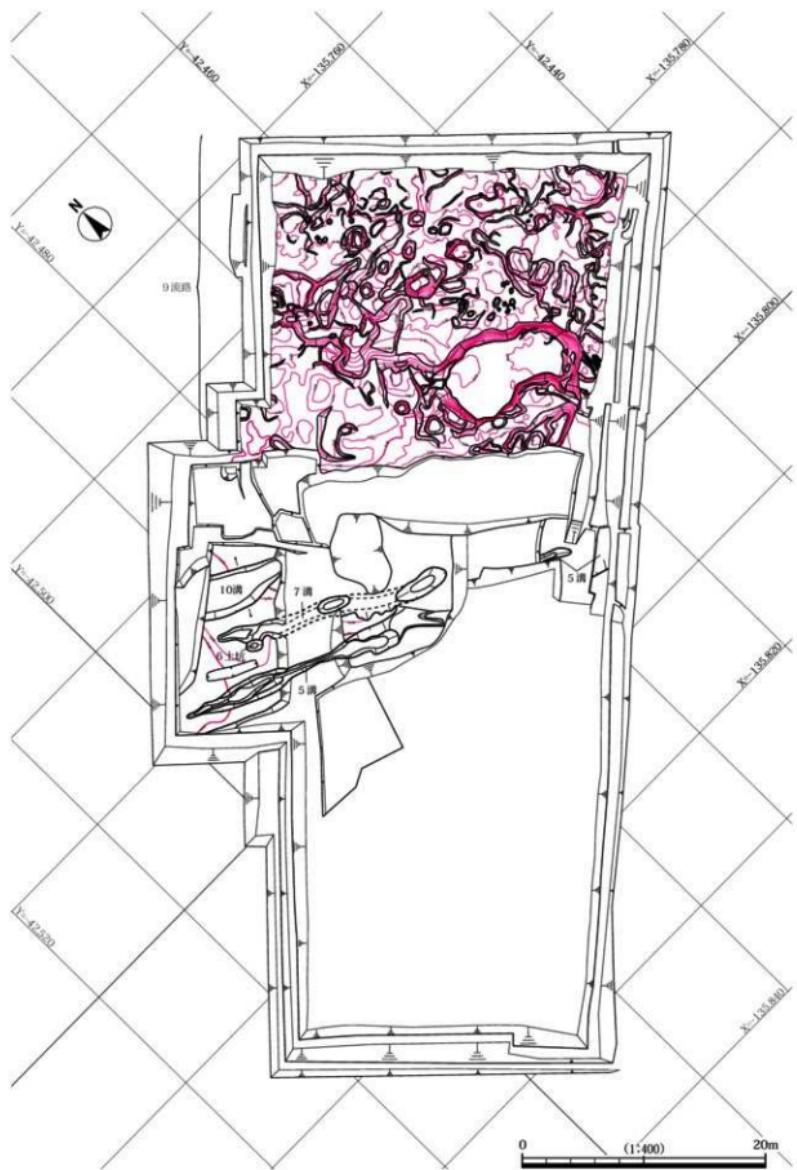


図 11 調査区平面

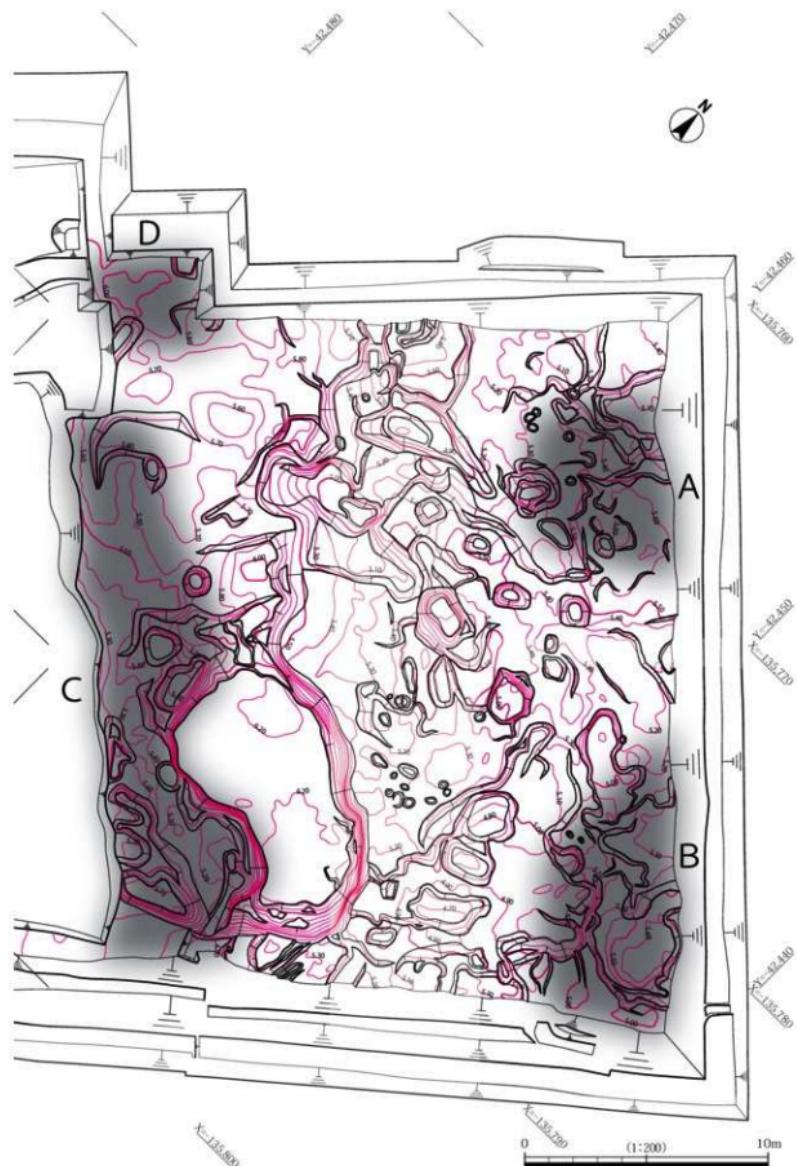


図 12 9流路 平面

5は広口壺の口縁部である。弥生時代中期前葉の所産か。6は無頸壺か。外面に櫛描き波状文が2条認められる。7～9は体部外面に櫛描き文を施すものである。7は9条1帯、8は3条1帯の櫛描き文を施す破片で、壺の頸部もしくは肩部にあたるものと推定する。9は小形の広口壺で7～8条を1帯とする櫛描き文を頸部から肩部に施す。いずれも弥生時代中期前葉の所産。

10～20は壺又は甕の底部である。特に14・15・17・18は底部に木の葉痕が明瞭に認められ、弥生時代中期前葉の所産と判断する。20は外面に平行タタキの痕跡が残るもので、弥生時代後期後半の所産である。上述したもの以外は、弥生時代中期前葉の所産となる蓋然性が高い。

21～39は土師器である。そのうち21～34は複合口縁の甕である。いずれも口頸部の破片である。体部の破片も出土しているが、接合関係が明瞭でなく、個体の把握が容易な口頸部を主として抽出した。これらは口縁部の形状を基に、a類・b類・c類の3つに分類することが可能である。a類は口縁部が内側に肥厚するもの、b類は口縁部が方形もしくは内外に若干肥厚するもの、c類は口縁部がどちらかというと外側に肥厚するもの、である。21～25はa類である。口縁部はいずれも面を成し、内傾するもの、やや外傾するものがあるが、いずれも内側に肥厚する。頸部上部の突出部から口縁までの垂直距離は4.3～5.0cmで、口縁の開き具合は10～30°と個体差がある。体部外面はハケ調整をし、内面はケズリ調整をする。26～29はb類である。口縁部は水平もしくはやや外傾し面を持つ。頸部上部の突出部から口縁までの垂直距離は4.5～5.0cmで、口縁の開き具合は10～20°で類似する。体部が残るものもなく、体部の調整は不明である。30～34はc類である。口縁部は水平もしくはやや外傾し面を持つ。頸部上部の突出部から口縁までの垂直距離は4.0～5.3cmで、口縁の開き具合は15～30°で個体差がある。

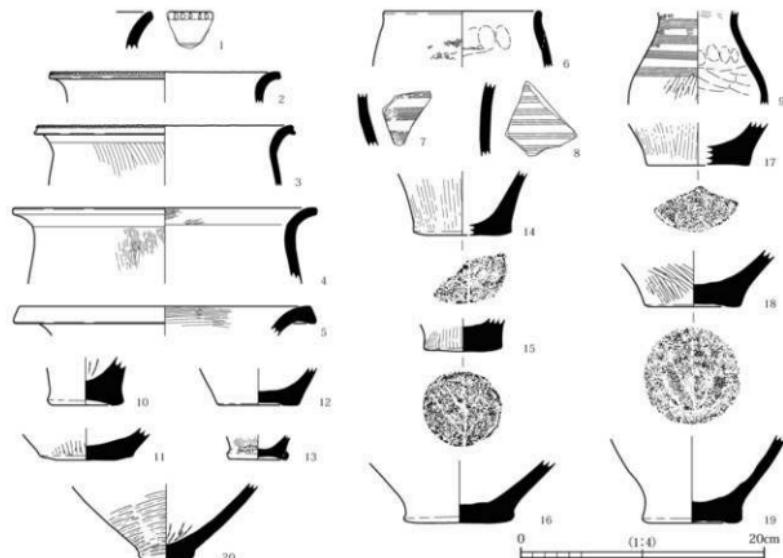


図13 9流路A 出土遺物(1)

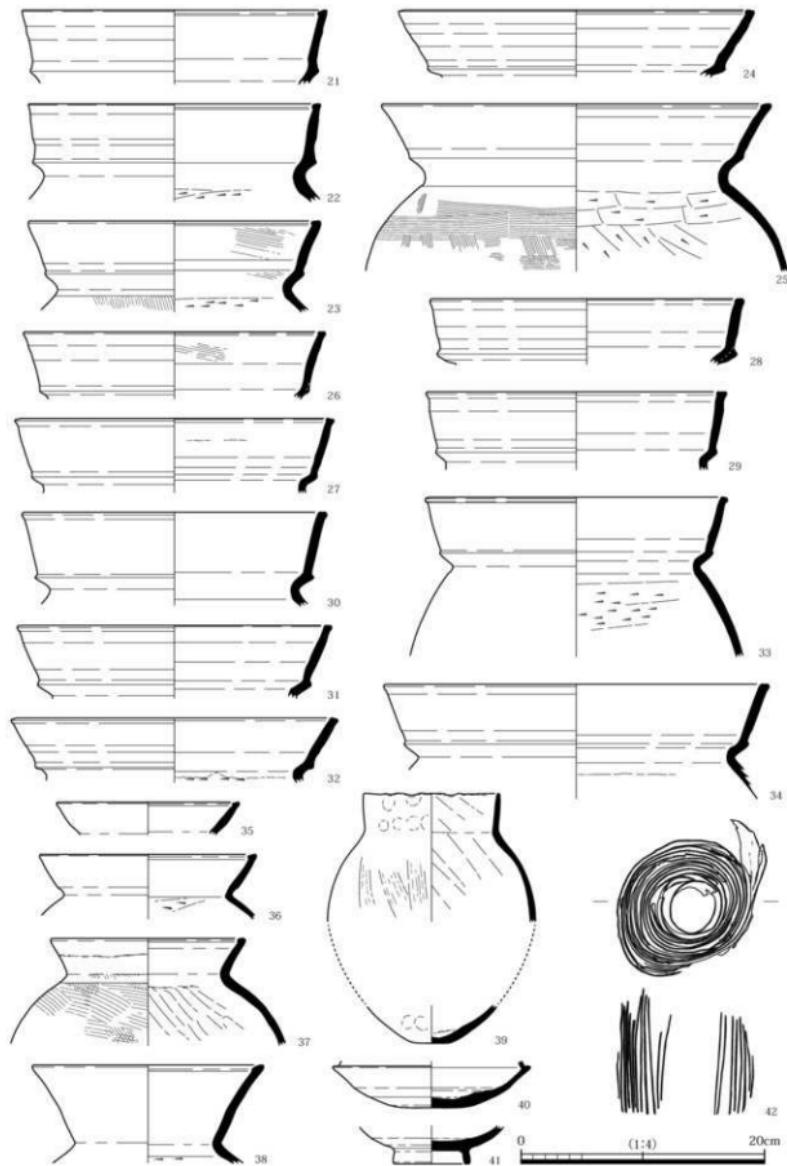


図 14 9 流路 A 出土遺物 (2)

る。体部が残るもののが少ないが、体部外面はナデ調整、内面はケズリ調整をする。a類・b類・c類の頸部上部の突出部から口縁までの垂直距離は、平均すると4.7cmである。口縁の開き具合は若干のばらつきがあり、10~30°である。胎土や焼成はいずれもよく似ており、在地産の可能性がある。

35~37は甕。35・36は布留形甕。口縁は内傾し、内側に肥厚する。古墳時代前期の所産。37は、口縁は水平に面を持ち内側に肥厚する。内面は指ナデ。古墳時代中期の所産。38は直口壺。口縁は内傾し、内側に若干肥厚する。古墳時代中期の所産。

39は甕か。器壁が薄く、口頸部は垂直に立ち上がり、口縁は手捏ね土器のように波打つことから、未調整であると思われる。こうした特徴を持つ土器は製塙土器とされるが、当土器は二次焼成で被熱した痕跡が判然としないため、甕としておく。古墳時代前期から中期の所産と推定する。

40は須恵器杯。口縁端部を欠く。古墳時代後期の所産。41は灰釉陶器椀。平安時代前期の所産。42はサクラン属の樹皮を丸めてひとまとめにしたもの。幅8~10cm程度の桜樹皮をおそらく3枚重ねて丸めたものである。素材であろうか。時期は不明である。

A地点で出土した遺物は、弥生時代前期から中期前葉、弥生時代後期後半から古墳時代前期、古墳時代中期、古墳時代後期、平安時代の大きく5つの時期にまとまるものと考えるが、出土量から推定するに、弥生時代前期から中期前葉、弥生時代後期後半から古墳時代前期の2つの時期を主体とする見てよい。なお、平安時代に属する灰釉陶器が1点のみではあるが出土している。後述の他地点の出土遺物中には同時期の遺物は皆無であり、後世の遺構が混在していた可能性もあり、当遺物の評価は周辺での調査の進展を俟つところである。

B地点で出土した遺物は、図15に示した43~49である。43~47は須恵器である。43・44は杯蓋。43は天井部に「×」のヘラ記号を施す。飛鳥時代の所産か。45は杯身。古墳時代後期の所産。46は甕の口頸部。頸部外面には幅5mm前後の3条1帯の細い波状文を施すが、部分的に幅8mm、6条となる箇所があることから、施文原体は本来幅広いもので、わざわざ幅広い原体を用いて、細い波状文を施している。そして、波状文の施文後に2条1帯の凹線を頸部に施す。古墳時代後期から飛鳥時代の所産。47は高杯脚部。外面中位に2条1帯の凹線を施す。48・49は土師器。48は鉢である。口縁は面を持ち、外面を横方向にヘラミガキする。飛鳥時代の所産。49は甕である。内面を縱方向に板ナデ調整する。

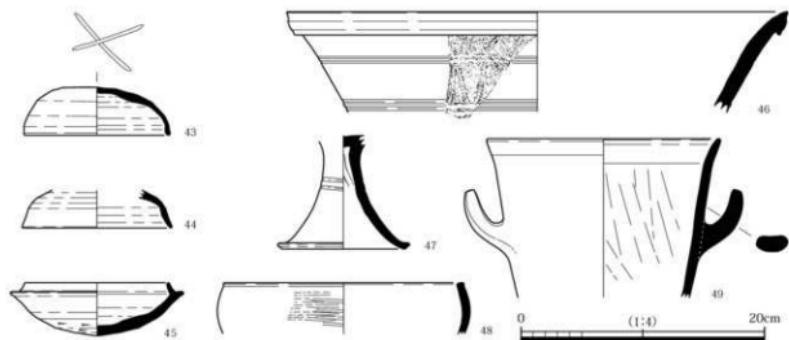


図15 9流路B 出土遺物

古墳時代後期から飛鳥時代の所産か。

B地点で出土した遺物は、古墳時代後期から飛鳥時代に属するものであり、時期的にまとまりを見せる。

C地点で出土した遺物は、図16に示した50～70である。50～54は弥生土器である。50は広口壺。51は甕。52は広口壺の口縁部。端部に扇形の刻み目を施す。以上は弥生時代中期前葉の所産か。53は底部。工具痕かと推定する痕跡が認められる。54は器台の口縁部か。端部に円形刺突を等間隔に施す。

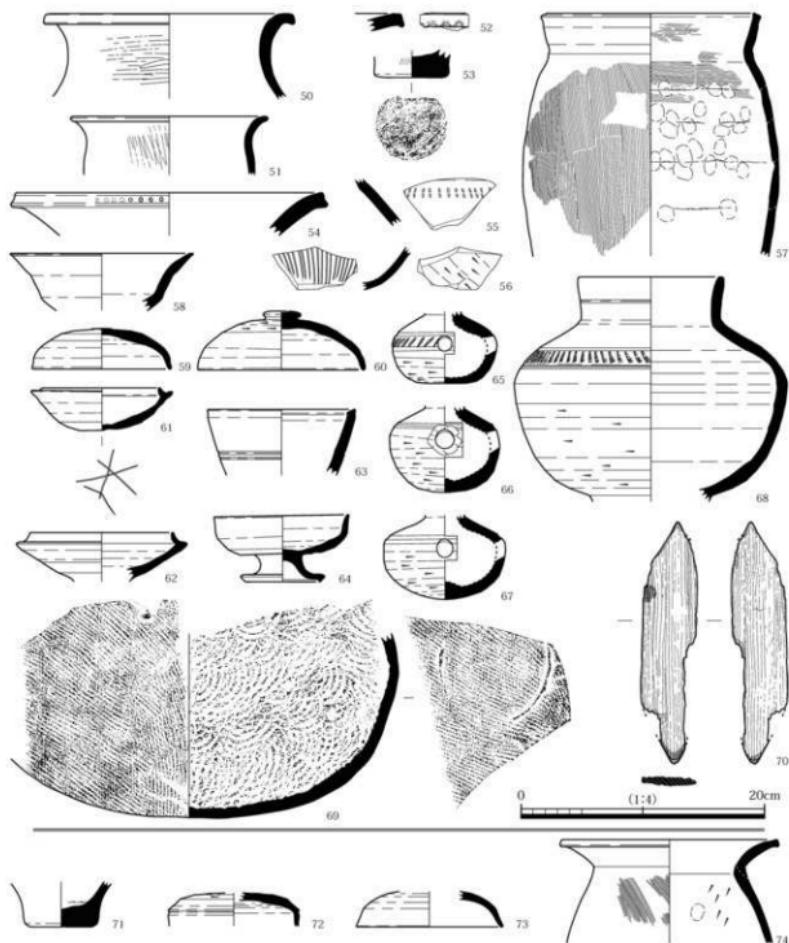


図 16 9流路C・D 出土遺物

弥生時代後期の所産か。

55～57は土師器である。55は壺の肩部の破片と推定でき、列点文が施文される。古墳時代初頭の所産か。56は外面ケズリ調整をし、内面に放射状の暗文を施す破片である。飛鳥時代所産の椀もしくは杯である。57は甕。内面に粘土の接合痕が明瞭に残る。飛鳥時代の所産か。58は瓦質土器である。外面黒化し、瓦質焼成の土器である。器形は土師器高杯かと推定する。古墳時代中期の所産か。

59～69は須恵器である。59は杯蓋。天井部と口縁部の境はなく、口縁端部を丸く收める。60は有蓋高杯の蓋。天井部と口縁部の境はなく、口縁端部を丸く收める。61は杯身。立ち上がりは受け部からわずかに出る程度で短い。62は有蓋高杯。杯部が直線的な形態である。63は鉢。体部に2条の凹線を施す。64は無蓋高杯。脚端部に段が認められる。65～67は甕。65は体部に列点文を施し、2条の凹線で区画する。66・67は肩部に凹線を施し、肩部まで回転ヘラケズリをする点で、焼き上がりに差はあるが、同工品の可能性がある。なお、66は体部の穿孔部分を打ち欠く。68は脚付き短頸壺。頸部に1条凹線、肩部に列点文を施し、2条の凹線で区画する。内面見込み部分に自然釉が認められることから、蓋のない状態で焼成されている。69は横瓶。自然釉の状況から、縱置きで焼成されたと判断できる。その際、体部製作時に蓋をした側を上にして焼成している。なお、焼成時に下になった側には径9cm程度の円形の溶着痕が認められる。須恵器はいずれも古墳時代後期から飛鳥時代の所産。

70は木器である。一部を欠損するが、板状の木器で、両小口を尖らせる。尖らせた部分はやや炭化しており、火を受けたものと推定する。材質はヒノキであり、その形状を併せて考えると斎串の可能性がある。時期は不明である。

C 地点で出土した遺物は、弥生時代中期前葉、弥生時代後期から古墳時代初頭、古墳時代後期から飛鳥時代に属し、大きく3つの時期にまとまる。出土量から推定すると、飛鳥時代に主体があると見てよい。

D 地点で出土した遺物は、図16に示した71～74である。71は弥生土器底部。72・73は須恵器杯蓋。72は天井部と口縁部の境は屈曲し明瞭。古墳時代中期の所産。73は天井部と口縁部の境はなく、口縁端部を丸く收める。なお、内面に自然釉が認められることから、無蓋高杯の可能性もある。飛鳥時代の所産か。74は土師器甕。口頸部が長い。飛鳥時代の所産か。

D 地点で出土した遺物は、弥生時代、古墳時代中期、飛鳥時代に属するものである。なお、C 地点とD 地点は、おそらく一続きの流路として復元できるものであり、出土遺物の時期も特に齟齬がないので、同一のまとまりと見て差し支えないと考える。

これら4つの遺物出土地点のうち、出土量が最も多かったのはA 地点である。面積比で見ても、A 地点が最も多く出土している。出土遺物全体について時期的な様相を見ると、弥生時代前期から中期前葉、弥生時代後期後半から古墳時代前期、古墳時代後期から飛鳥時代の3つの時期が主体となる。現地での細かい流路の把握は困難であったが、これら遺物出土地点と出土遺物の内容から、細かい幅の狭い流路を復元してみたい。

まず、弥生時代前期から中期前葉の時期にA 地点を通る狭い流路が存在していた。そして、弥生時代後期後半から古墳時代前期の時期にもほぼ同じ場所を通る狭い流路が存在していたが、これについては弥生時代中期前葉以降も連続と流路があったのか、一度埋没し、再び同じ場所に流路が形成されたのか、判断できない。

古墳時代後期から飛鳥時代には、B 地点を通る狭い流路が存在していた。また同じ時期にC・D 地点を通る流路も存在していた。両者が併存していたかどうかは定かではないが、断面観察からB 地点は渥

地のような状況であった蓋然性が高い。なお、C・D地点を通る流路は、断面にその痕跡が認められ(図8⑩・⑪)、幅5m程度の流路であったことがわかる。ちょうど9流路の西端を通るもので、北西から南東へ流下したものと判断できる。すなわち、古墳時代後期から飛鳥時代においては、当地にC・D地

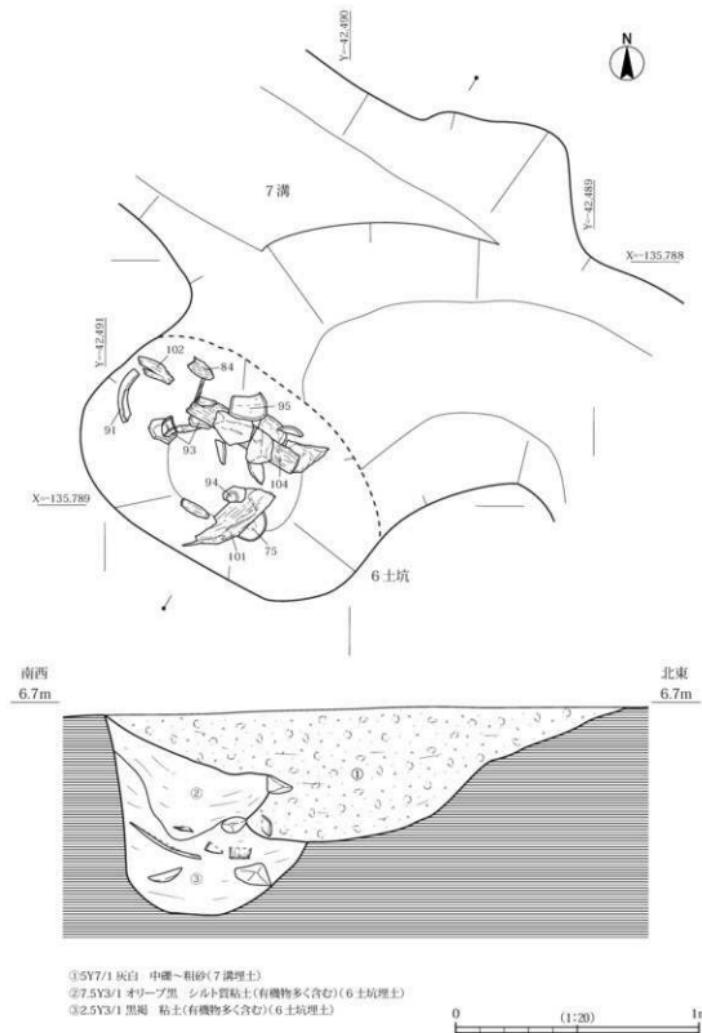


図17 6土坑 平・断面

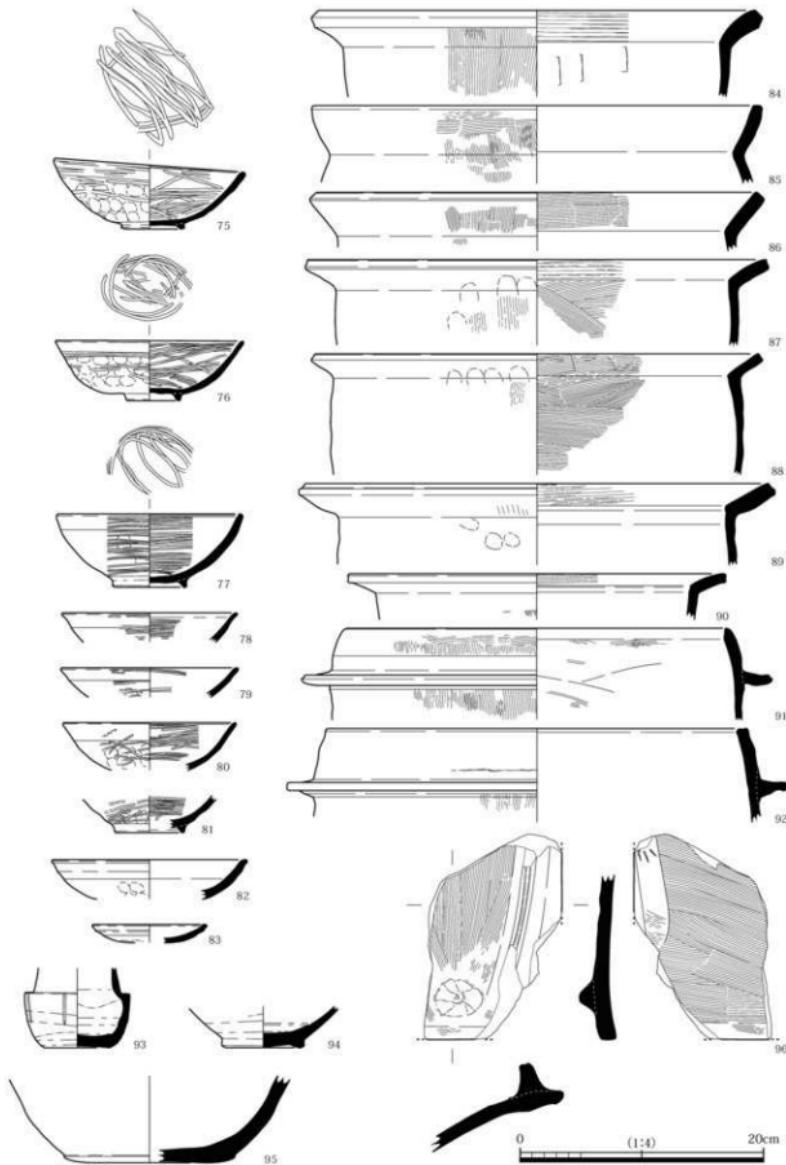


図18 6土坑 出土遺物(1)

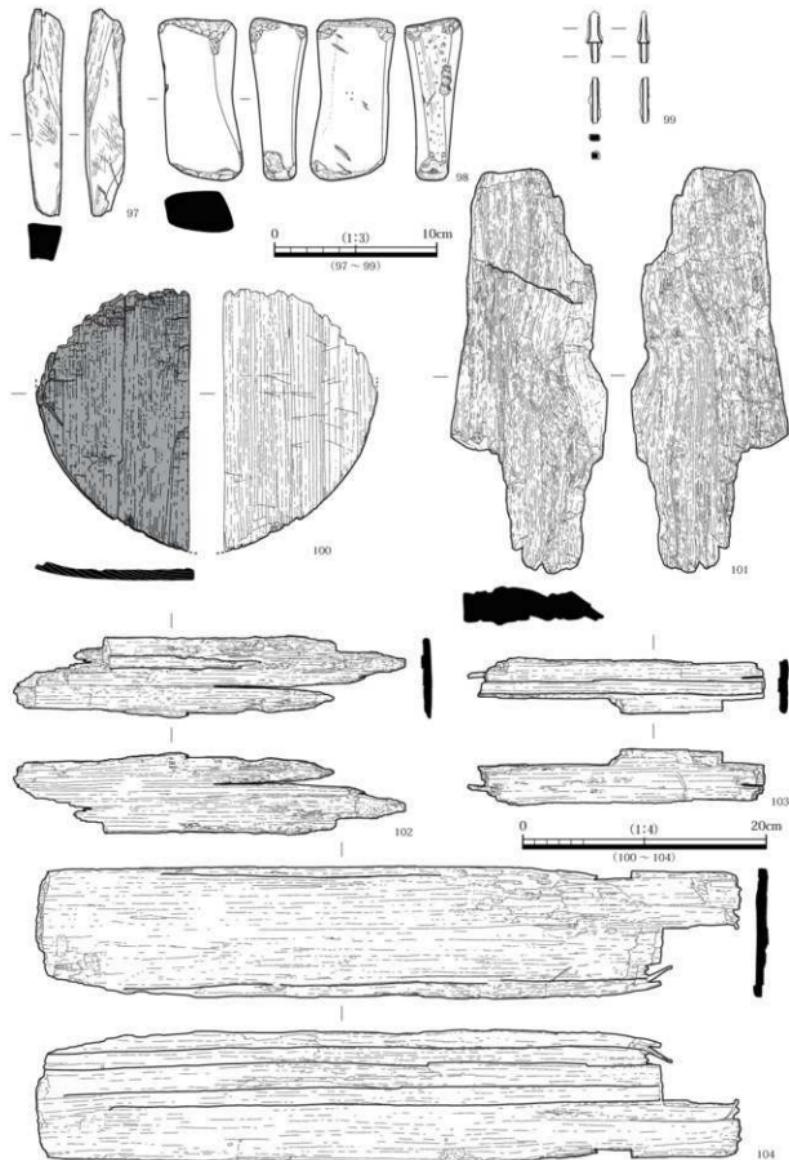


図19 6 土坑 出土遺物 (2)

点を通る流路があり、それ以東は湿地状の環境であり、当流路より西側において集落を営むような環境があつた蓋然性が高い。

なお、今次調査で検出した当流路の上流及び下流に相当すると判断できる流路が、既往調査により検出されている。上流に相当する流路は、吹田市教育委員会が平成14年（2002）に行った調査で見つかった（図4 市教委2002地点）。谷状地形を埋めるように浅い流路が検出され、弥生土器・中世の瓦器・土師器等が出土したとされる。出土遺物から埋没は鎌倉時代頃と推定されている。なお、出土した弥生土器はIV～V様式に属するものとされ、東海系の弥生土器の比率の多さが目立つとされる（吹田市教委2004）。ところで、吹田市教委2004の報告書に所取されている弥生土器の図面を見る限り、今次調査でも出土したII様式に属する弥生土器が一定量含まれているように思われる。

また、下流に相当する流路は、当センターが平成18・19年（2006・2007）に調査を行ったC3・C4地区で検出した1045・1046谷、1042・1043自然流路が該当する（図4 06-1 : C3・C4地点）。流路からは、上層で古墳時代後期から飛鳥時代の遺物が、中層で布留式土器、下層で弥生時代中期後半から後期の遺物が出土した。中でも、布留式土器は器形や技法的な特徴から山陰系土器とされる（大文セ2008）。今次調査成果と極めて整合的であるが、弥生時代前期から中期前葉に属する遺物がほとんど認められないという差異がある。

## 6 土坑（図11・17～19、写真図版4・6・7・13～15）

西区において、基盤層上面で検出した。X = -135,789、Y = -42,490.5地点に位置する。規模は長径1.3m、短径0.8mを測り、平面楕円形を成す。断面形はU字形で、深さ0.8mを測る。埋土は粘土を主体とする。埋土は2層に分別したが、時期的な差ではなく、ほぼ一連のものと判断する。なお、当土坑の北東側は7溝により切られる。当初、井戸かとも考えたが、基盤層が礫層であり、特に湧水層に到達しているとも認定できなかったため、土坑と判断した。なお、埋土が粘土であることを勘案すれば、溜め井のようなものであったことも想定できる。埋土中から、瓦器、土師器、須恵器、瓦質土器、磁器、石器、木器、鉄器、種実が出土した。

75～81は瓦器で、いずれも楕である。このうち、77・81は口縁直下の内面凹線や幅の狭いヘラミガキを密に施すといった特徴から桶葉型と判断でき、その他のものは和泉型に分類できる。78・79・80は他に比べて若干新しい時期の所産になる可能性がある。概ね平安時代末～鎌倉時代初頭の所産である。

82・83は土師器杯・皿である。いずれも平安時代後期の所産。84～90は土師器鍋。86～90は「く」字に屈曲し、直線的に伸びる口部を有し、体部が口縁よりも内側に収まる点でよく似た形態を持つ。91・92は土師器羽釜である。どちらも精良な胎土で、鍋とは異なる胎土である。

93は白磁か。体部に縱方向に6箇所の溝を彫るもので、瓜形合子の身と判断する。口縁部を若干欠くが、極めて長い立ち上がりが特徴的である。立ち上がり及び底部は露胎である。故宮博物院編2016に所取されている「南安窯」に類品の出土があり、同窯で製作されたものである蓋然性が高い。なお、南安窯出土品は「青白釉瓜棱盒」と報告され、宋代とされている。94は白磁碗。IV類に分類されるもので、11世紀後半から12世紀前半の所産になる。

95は瓦質土器である。内面は細かい擦痕が多数あり、ツルツルしていることから擂鉢として使用されたものと判断する。当土器は、東播系須恵器の焼成不良品ではないかと推定する。96は移動式竈の焚口部の破片である。外面には焚口部の脇に突起を付し、焚口部に沿うように突帯を付す。焚口部内面

には下から15cmの位置に小動物(ネズミか?)の爪痕が残る(写真図版15)。土器焼成前の乾燥時に足をかけたものと推定する。また、内面には煤が全面に付着する。

97・98は石器である。いずれも砥石であり、97が粘板岩製、98は砂岩製である。

99は鉄器である。鉄鎌の間と莖部分の破片である。

100~104は木器である。100は曲物の底板か。片面が焼け焦げる。101は加工された木材。102・103は板状の加工材。片面に高さ1~2mm程度の凸帯がある。104は板状の加工材。片面の両端に凸帯があり、もう一方の面には中央部に凸帯、上部に段がある。当木器は一部破損しているが、端部の状況からほぼ原形を留めているものと判断する。102・103についても本来は104と同様の木器であった可能性がある。何かしらの製品を形作る部材と思われるが、そのものが何であるかは不明である。

また、当土坑を調査時、埋土中に有機物が多く認められたため、土を持ち帰り洗浄調査した。その結果、カナムグラ・オナモミ・マクワウリ・センダン・スミレ・トチノキ等の種実が見つかった。特にカナムグラの種実は、およそ1200個見つかり、これら多量の種子の存在から、当土坑は秋から冬にかけて埋没したものと推定できる。

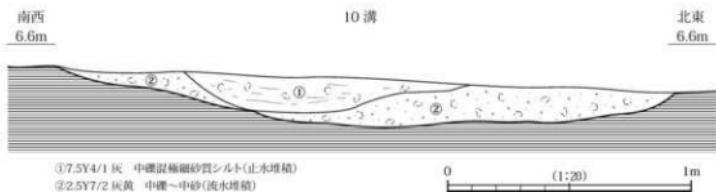


図20 10溝 断面

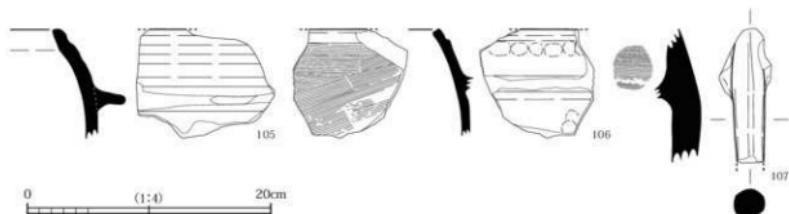


図21 10溝 出土遺物

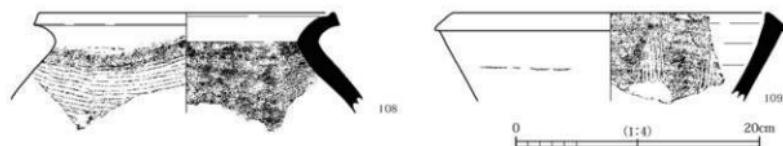


図22 7溝 出土遺物

以上のことから、当土坑は平安時代末から鎌倉時代初頭に属するものと判断する。

#### 10溝（図11・20・21、写真図版7・15）

西区において基盤層上面で検出した。両端部が壊乱になるため全容は明らかでないが、北西—南東方向を指向する。検出した部分の規模は、幅3.5~1.8m、深さ約0.2mを測り、検出長約6.5mである。断面形は皿形で、埋土は中礫~中砂を主体とし、流水堆積である。

埋土中から、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、白磁等が出土した。そのうち土師器と瓦質土器を図示し得た。105・106は土師器羽釜である。105は口縁外面直下に段を持ち、内面のハケ調整が明瞭である。107は瓦質土器の足釜脚部である。体部内面にはヨコハケ調整が明瞭に残る。出土遺物から、鎌倉時代に属する溝と判断する。

なお、当調査区の北西において、2012年度に15区とした調査（図4 12-1:15）が行われており、その際に15002溝が検出されている（大文セ2014）。この溝の規模と出土遺物の内容から見て、今次調査で検出した10溝と同一の溝になるものと判断する。

#### 7溝（図11・17・22、写真図版4・15）

調査区中央において、基盤層上面で検出した。両端部が壊乱になるため全容は明らかでないが、北西—南東方向を指向する。検出した部分の規模は、幅1.5~1.0m、深さ約0.6mを測り、検出長約19.5mである。断面形は椀形で、埋土は中礫~粗砂を主体とする。

埋土中から、須恵器、陶器が出土した。108は須恵器甕である。外面は横方向の平行タタキ目が明瞭である。東播系須恵器であり平安時代の所産と推定する。109は備前焼擂鉢。室町時代の所産。出土遺物から室町時代に属する溝と判断でき、上述の10溝よりも後出するものと推定する。

なお、10溝と7溝、さらには近世から近代に属する5溝は方向を同じくし、その位置を若干ずらして形成されている。ちょうど9流路の南西肩口から時代を経るごとに西へ移動しているようである。これらの溝は、9流路埋没後に、その代用として用排水を目的として掘削されたものであろうか。そうであるならば、現代のボックスカルバート水路もその一連の歴史の中で捉えられ得るものであるかもしれない。また、この場所に集中して溝が造られた理由には、古流路埋没による微高地と9流路埋没による微高地に挟まれた低地であったということが考え得る。

#### その他出土遺物（図23）

機械掘削時に出土した遺物のうち、図化し得たものを報告する。110は丸瓦である。須恵質に焼成されており、凹面側縁を面取りする。

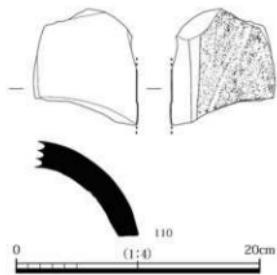


図23 機械掘削 出土遺物

## 第5章 総括

今次調査における成果について、周辺での既往調査成果を併せて見ることで位置付けてみたい。

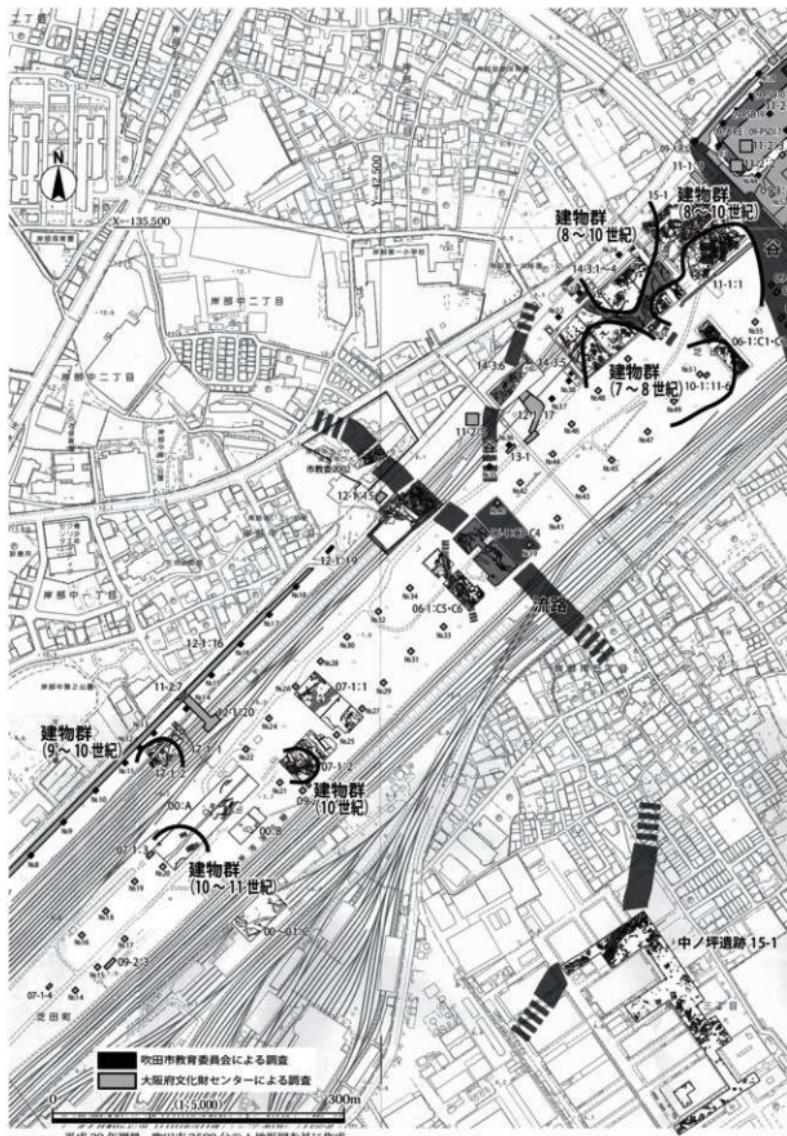
9流路は、市教委2002と06-1:C3・C4の調査区を結ぶようにして、一連の流路として復元できる(図24)。当流路は、弥生時代前期から飛鳥時代まで、若干その位置を変えながらも同じ場所を流れていることは確実である。流路が長期に亘って存在し、それに伴う湿地帯が形成され、草木が生い茂るような環境であったと類推する。また、今次調査において、弥生時代前期から中期前葉の土器がまとまって出土し、当該期の集落の存在が示唆される成果があったことは重要である。

ところで、今次調査では平安時代の土器が1点、市教委2002の調査(吹田市教委2004)では鎌倉時代の遺物が数点、同流路から出土している。その出土点数は少なく、また06-1:C3・C4調査区では当該期の遺物が出土していないため、奈良時代以降の様相が判然としない。そうした中、今次調査では10溝の様相から、鎌倉時代には当流路の西側に流路と同様の方向に溝が掘削されていたことが明らかとなった。この溝の存在は、流路が機能せず、行き場を無くした水の処理のために、用排水路として新たに溝が掘削されたという状況を示すものと理解しておきたい。この想定を是とするならば、鎌倉時代まで流路が機能していた可能性があり、市教委2002の調査成果とも整合的である。当流路は、奈良時代以降どのような状態であったのか、また各時期における流路の詳細等について、今後の調査によって明らかにされることを切望し、課題としておきたい。

また、当流路とそれに伴う湿地帯はそれなりの幅を持っており、巨視的には土地利用の境目となり得る。すなわち、土地の利用方法が当流路を境に分断され、東西で異なる可能性がある。発掘調査の粗密があるため、厳密には明らかにし得ないが、今次調査区よりも東側には古代の集落が大きく展開していく様相が看取できる。当流路は、付近における集落や生産地の在り方を考察する上で、重要な遺構となるであろう。

さらに、当流路が流下していく先を見通すと、中ノ坪遺跡がある。平成27年度(2015)の調査(中ノ坪遺跡15-1)において、調査区北端で弥生時代と古代に属する流路が検出された(大文セ2017a)。他にも弥生時代前期から中期初頭の遺構・遺物、古墳時代前期の遺構・遺物等、今次調査の成果と合致する時期の人々の営みが明らかになった。また、中ノ坪遺跡に関する吹田市の調査では、古墳時代前期の集落と湿地状の地形が見つかっている(吹田市2012)。同調査で、千里丘陵起源の赤褐色砂礫層がG.L.-4m付近で検出されていることは、今次調査で検出した基盤層となる砂礫層との関連を窺わせ、同一層になる可能性がある。中ノ坪遺跡の流路は、今次調査で見つかった流路と同一、もしくはそこから派生した流路である蓋然性は高い。また、一連かどうかは別として、弥生時代前期から中期前葉、古墳時代前期等に属する時期の集落が流路沿いに展開していた可能性がある。

最後に、今次調査では6土坑から白磁かと考えられる瓜形合子が、12世紀後半から13世紀初頭に属する遺物とともに出土した。管見では国内の類例を知らず、極めて希少な遺物と思われる。その故地は中国福建省南安窯である蓋然性が高い。同じ時期、同安窯とされる青磁が国内に一定量輸入されている事実から、その近隣にある南安窯からも製品が持ち込まれたとしても不思議ではない。当時の流通を考える上で貴重な成果があった。



## 引用・参考文献

- 市原実 編著1993『大阪層群』創元社
- 太田陽子・成瀬敏郎・田中眞吾・岡田篤正編2004『日本の地形6 近畿・中国・四国』東京大学出版会
- 故宮博物院編2016『故宮博物院藏中国古代窯址標本 福建(下)』故宮出版社
- 古代の土器研究会編1992『古代の土器1 都城の土器集成』
- 古代の土器研究会編1993『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』
- 古代の土器研究会編1994『古代の土器3 都城の土器集成Ⅲ』
- 小森俊寛2005『京から出土する土器の編年研究—日本律令の土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀—』真陽社  
(財)大阪府文化センター2003『古式土器の年代学』
- (財)古代学協会・古代学研究所編1994『第二章 土器と陶磁器』平安京提要 角川書店
- 吹田市史編さん委員会1991『吹田市史』第1巻 吹田市役所
- 吹田市史編さん委員会1981『吹田市史』第8巻 吹田市役所
- 積山洋2004『大阪湾沿岸の古墳時代土器製造』季刊考古学別冊14号 雄山閣
- 全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会編2005『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨集・資料集
- 田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
- 中世土器研究会編1998『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 辻美紀1999『古墳時代中・後期の土器に関する一考察』『国家形成期の考古学 大阪大学考古学研究室10周年記念論集』大阪大学考古学研究室
- 寺沢薰1986『畿内古式土器の編年と二、三の問題』奈良県立橿原考古学研究所『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊
- 橋本久和1991『大阪北部の古代後期・中世土器の様相』高槻市文化財年報 昭和63年・平成元年度 高槻市教育委員会
- 間壁忠彦1991『備前焼』考古学ライブラリー60 ニューサイエンス社
- 森田克行1990『津津地域』寺沢薰・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年 近畿編II』木耳社
- <発掘調査報告書>
- (財)大阪府文化財調査研究センター1999『吹田操車場遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第42集
- (財)大阪府文化財調査研究センター2001『吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第66集
- (財)大阪府文化財センター2008『吹田操車場遺跡III』(財)大阪府文化財センター調査報告書第180集
- (財)大阪府文化財センター2010『吹田操車場遺跡IV』(財)大阪府文化財センター調査報告書第201集
- (財)大阪府文化財センター2011a『吹田操車場遺跡V』(財)大阪府文化財センター調査報告書第216集
- (財)大阪府文化財センター2011b『吹田操車場遺跡VI』(財)大阪府文化財センター調査報告書第217集
- (公財)大阪府文化財センター2011c『吹田操車場遺跡VII』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第220集
- (公財)大阪府文化財センター2012『明和池遺跡1 吹田操車場遺跡8 西の庄東遺跡』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第232集
- (公財)大阪府文化財センター2013『吹田操車場遺跡9』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第240集
- (公財)大阪府文化財センター2014『吹田操車場遺跡10・明和池遺跡3』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第248集
- (公財)大阪府文化財センター2015『吹田操車場遺跡11』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第262集
- (公財)大阪府文化財センター2016a『吹田操車場遺跡12』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第270集
- (公財)大阪府文化財センター2016b『吹田操車場遺跡13』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第274集
- (公財)大阪府文化財センター2017a『中ノ坪遺跡』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第277集
- (公財)大阪府文化財センター2017b『吹田操車場遺跡14』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第284集
- (公財)大阪府文化財センター2018『吹田操車場遺跡15』(公財)大阪府文化財センター調査報告書第291集
- 吹田市教育委員会・吹田市都市整備部2004『吹田操車場遺跡1-市営岸部中住宅建替工事に伴う発掘調査報告書』
- 吹田市教育委員会・独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構2008『吹田操車場遺跡確認調査報告書—吹田操車場跡地地区(仮称)の整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査—』
- 吹田市教育委員会2010a『平成21(2009)年度埋蔵文化財緊急発掘調査報表』
- 吹田市教育委員会2010b『吹田市埋蔵文化財発掘調査報告集1』(吹田操車場遺跡第3次・第4次調査)
- 吹田市教育委員会2011『平成22(2010)年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』
- 吹田市教育委員会2012『中ノ坪遺跡発掘調査報告書1 第1次・第3次発掘調査』
- 太宰府市教育委員会2000『太宰府条坊跡X 陶磁器分類編』
- 兵庫県教育委員会1998『神出窯跡群』兵庫県文化財調査報告 第171集
- 兵庫県教育委員会2011『神出窯跡群II』兵庫県文化財調査報告 第407集

## 掲載遺物一覧表

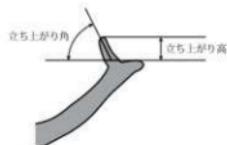
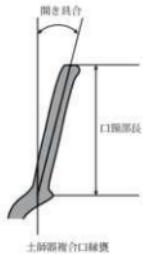
遺物番号	種別	器形	時期	調査区名	遺構名	残存率	成形及び調整の特徴等 (ヨコナデ・回ナデは省略、砂→はヘラ ケズリにより砂が削った方向)	外色調	備考		
1 13 9	刃生土器	甕	弥生時代	東	9流路(3.8)	(3.8)	—	10 以下 以下	10VR7/2 にぶい黄粉 L縫部切口あり	I様式か	
2 13 9	刃生土器	甕	弥生時代	東	9流路(18.6)	—	(2.5)	10 以下 以下	10VR6/2 灰黃褐色 L縫部切口あり	I様式か	
3 13 9	刃生土器	甕	弥生時代	東	9流路(20.8)	—	(4.9)	10 以下 以下	10VR7/2 にぶい黄粉 L縫部切口あり	I様式か	
4 13 —	刃生土器	甕	弥生時代	東	9流路(24.6)	—	(6.2)	10 以下 以下	10VR8/3 にぶい相 外表面:タハケ、保有者	II様式か	
5 13 —	刃生土器	広口甕	弥生時代	東	9流路(23.8)	—	(2.4)	10 以下 以下	10VR7/3 にぶい黄粉 内表面:土被部里焼け	I様式か	
6 13 9	刃生土器	無通窓	弥生時代	東	9流路(12.6)	—	(4.6)	10 以下 以下	10 内面:指さえ 接合部明瞭(内側接合) 外表面:繩文波状文	7.5VR8/1 浅黃褐色 II様式か	
7 13 9	刃生土器	広口甕	弥生時代	東	9流路(4.0)	(4.2)	—	10 以下	10VR8/2 浅黃褐色 繩文(9条1帯)	II様式か	
8 13 9	刃生土器	広口甕	弥生時代	東	9流路(6.1)	(5.9)	—	10 以下 以下	10VR7/3 にぶい黄粉 繩文(3条1帯)	II様式か	
9 13 9	刃生土器	広口甕	弥生時代	東	9流路	—	(11.4)	10 以下 以下	10 内面:ナメ方向のナデ 外表面:タハケのち繩文(7~8条1 帯)のち底部下半ラミガキ	10VR8/3 浅黃相 II様式	
10 13 —	刃生土器	底部	弥生時代	東	9流路	6.2	—	(3.9)	10 以下	10VR4/2 灰黃褐色 摩擦のため調整不詳	
11 13 —	刃生土器	底部	弥生時代	東	9流路	—	(7.6)	(2.6)	10 以下	10 外表面:タテ方向のヘラミガキ 7.5VR7/3 にぶい相	
12 13 —	刃生土器	底部	弥生時代	東	9流路	(6.4)	—	(3.0)	10 以下	10 全面摩耗したため調整不詳 輪台高台風	10VR6/3 にぶい黄粉
13 13 —	刃生土器	底部か	弥生時代	東	9流路	—	4.6	(2.0)	10 以下	10 外表面:タハケ、工具頭頭著 底部部點貼り付け 底凹内を掘りようによ工具頭	10VR5/2 灰黃褐色
14 13 9	刃生土器	底部	弥生時代	東	9流路	—	(8.0)	(5.3)	10 以下 以下	10 内面:摩擦のため調整不詳 外表面:タハケ(基闊3mm前後) 底凹内(葉出あり)	10VR7/3 にぶい黄粉 II様式か
15 13 9	刃生土器	底部	弥生時代	東	9流路	—	6.4	(2.7)	10 以下 以下	10 内面:指さえ 外表面:タハケ(基闊2~3mm) 底凹内(葉出あり)	10VR7/2 にぶい黄粉 II様式か
16 13 —	刃生土器	底部	弥生時代	東	9流路	—	9.0	(5.1)	10 以下 以下	10 内面:摩擦のため調整不詳 外表面:摩擦のため調整不詳、黒斑あり 5YR5/4 にぶい赤褐色 底凹内(葉出)	5YR5/4 にぶい赤褐色 II様式か
17 13 9	刃生土器	底部	弥生時代	東	9流路	—	(8.4)	(3.5)	10 以下 以下	10 外表面:タハケ(基闊3mm前後) 底凹内(葉出) 底部の葉出あり	10VR7/2 にぶい相 II様式か
18 13 9	刃生土器	底部	弥生時代	東	9流路	—	(8.0)	(4.6)	10 以下	10 外表面:タハケ及びナメ方向のヘラミガキ 底凹内(葉出)若干黒斑あり 底凹内(葉出風)	7.5VR7/3 にぶい相 II様式か
19 13 —	刃生土器	底部	弥生時代	東	9流路	—	8.2	(7.2)	10 以下	10 外表面:摩擦のため調整不詳 底凹内形状(マツリ)、輪台高台風	7.5VR6/3 にぶい相 II様式か
20 13 —	刃生土器	費底部	弥生時代	東	9流路	3.5	—	(6.3)	20 以下	10 内面:右上がりの工具頭タハキ 外表面:右上がりの工具頭	10VR6/3 にぶい黄粉 VII様式か
21 14 10	土師器	甕(複合口縁)	古墳時代	東	9流路	(24.8)	—	(6.1)	10 以下	L縫部内側する面もつ、内側に肥厚 7.5VR7/3 にぶい相	L縫部長5cm L縫の開き外へ15° 布留1~2式か
22 14 10	土師器	甕(複合口縁)	古墳時代	東	9流路	(23.8)	—	(8.0)	10 以下	10 内面:体部ヘラケズリ(砂→) L縫部面もつ。内側に肥厚 10VR6/2 灰黃褐色	L縫部長4.8cm L縫の開き外へ10° 布留1~2式か
23 14 10	土師器	甕(複合口縁)	古墳時代	東	9流路	(23.8)	—	(7.5)	10 以下	10 内面:L縫部ヨコバケ、体部ヘラケズリ (砂→) 外表面:体部タハケ L縫部面もつ。内側に肥厚 10VR6/3 にぶい黄粉	L縫部長4.3cm L縫の開き外へ20° 布留1~2式か
24 14 10	土師器	甕(複合口縁)	古墳時代	東	9流路	(29.2)	—	(5.5)	10 以下	10 内面:L縫部面もつ。内側に肥厚 7.5VR7/3 にぶい相	L縫部長4.8cm L縫の開き外へ30° 布留1~2式か
25 14 10	土師器	甕(複合口縁)	古墳時代	東	9流路	(31.6)	—	(13.7)	10 以下	10 内面:体部ヘラケズリ(砂→) 外表面:ヨコハケのちタハケ、回部ヨコ バケ L縫部面もつ。内側に肥厚 7.5VR7/4 にぶい相	L縫部長4.5cm L縫の開き外へ30° 布留1~2式か
26 14 10	土師器	甕(複合口縁)	古墳時代	東	9流路	(24.6)	—	(5.5)	10 以下	10 内面:ヨコハケ 4YR6/3 にぶい黄粉	4YR6/3 にぶい黄粉 L縫の開き外へ20° 布留1~2式か
27 14 10	土師器	甕(複合口縁)	古墳時代	東	9流路	(25.2)	—	(6.1)	10 以下	10 外表面:摩擦のため調整不詳 以下 L縫部面もつ	5YR7/3 にぶい相
28 14 10	土師器	甕(複合口縁)	古墳時代	東	9流路	(25.6)	—	(5.4)	10 以下	10 内面:L縫部若干面もつ、肥厚しない 7.5VR7/2 明鏡風	L縫部長4.5cm L縫の開き外へ15° 布留1~2式か
29 14 10	土師器	甕(複合口縁)	古墳時代	東	9流路	(24.4)	—	(6.4)	10 以下	10 内面:L縫部面もつ。内側に若干肥厚 以下 L縫の開き外へ10° 5YR7/4 にぶい相	L縫部長5.0cm L縫の開き外へ10° 布留1~2式か

遺物番号	辨別番号	写真版番号	種別	器形	時期	調査区分名	遺構名	L.H径・長 底径・幅 器高・厚 (%)	残存率 (%)	成形及び調節の特徴等 (ヨコナデ・ヨクナデは省略、砂→はヘラ ケズりによる砂が動いた方向)		外色調	備考		
										内面	外側				
30	14	10	土師器	甕(複合 13縫)	古墳 時代	東	9流路	(24.8)	—	(7.7)	10 以下	内面：体部ヘラケズリ 口縁部面もつ。若干外側に肥厚	5YR3/1 黒褐	L.断面長5.3cm L.縫の開き外へ15° 布留1～2式か	
31	14	10	土師器	甕(複合 13縫)	古墳 時代	東	9流路	(25.6)	—	(6.0)	10 以下	内面：口縁部面もつ。外側にやや肥厚	10YR7/2 にぶい黄褐	L.断面長4.9cm L.縫の開き外へ20° 布留1～2式か	
32	14	10	土師器	甕(複合 13縫)	古墳 時代	東	9流路	(26.8)	—	(5.3)	10 以下	内面：口縁部面もつ。若干外側に肥厚	10YR7/2 にぶい黄褐	L.断面長4.0cm L.縫の開き外へ30° 布留1～2式か	
33	14	10	土師器	甕(複合 13縫)	古墳 時代	東	9流路	(24.0)	—	(13.1)	10 以下	内面：体部ヘラケズリ(砂→) 口縁部面もつ。外側に肥厚	2.5Y7/4 淡黄	L.断面長4.6cm L.縫の開き外へ15° 布留1～2式か	
34	14	10	土師器	甕(複合 13縫)	古墳 時代	東	9流路	(31.4)	—	(9.4)	10 以下	内面：体部ヘラケズリ(砂→) 口縁部面もつ。若干外側に肥厚	10YR7/3 にぶい黄褐	L.断面長5.0cm L.縫の開き外へ20° 布留1～2式か	
35	14	—	土師器	甕	古墳 時代	東	9流路	(14.8)	—	(2.7)	10 以下	内面：口縁部内傾して内側に肥厚	10YR7/2 にぶい黄褐	布留1～2式か	
36	14	—	土師器	甕	古墳 時代	東	9流路	(17.6)	—	(5.3)	10 以下	内面：体部ヘラケズリ(砂→)、底部横縫 壁	10YR6/3 にぶい黄褐	布留1～2式か	
37	14	—	土師器	甕	古墳 時代	東	9流路	(15.8)	—	(8.8)	20	外面：表面ハケ目、粘土接合痕あり 内面：口縁部内傾して内側に肥厚	10YR6/4 にぶい黄褐	辻編年4回路	
38	14	—	土師器	直立甕	古墳 時代	東	9流路	(18.8)	—	(8.0)	10 以下	内面：体部ヘラケズリ(砂→) 口縁部内傾して若干内側に肥厚	10YR6/3 にぶい黄褐	辻編年4回路	
39	14	—	土師器	甕	古墳 時代	東	9流路	(11.0)	—	—	10	外面：ナメ方向の板ナデ 内面：体部タ方型の板ナデ、下部指押 えのち板ナデ	10YR5/2 灰黄	古墳前期～中期か 製作土器か	
40	14	—	須恵器	杯身	古墳 時代	東	9流路	—	(16.2)	(3.8)	25	外面：内面ヘラケズリ。灰かぶり。自然 転化	N6/0 灰	立上がり角70° TK10～MT85型式	
41	14	12	灰陶 器類	甕	平安 時代	東	9流路	—	(6.2)	(3.1)	30	外面：内面ヘラケズリ。高台接地面施釉 なし	N8/0 灰白	K90式か 9世紀後半	
42	14	12	木造 素材か	甕	東	9流路	14.5	10.3	0.1	—	—	—	—	—	サクラ園
43	15	11	須恵器	杯立蓋	飛鳥 時代	東	9流路	(11.8)	—	3.9	80	内面：見込みヨコナデ 外面：天井部に棒状工具による記号あり (不鮮明)、灰かぶり	N4/0 灰	吹け玉 TK217型式(古)と 飛鳥1か	
44	15	—	須恵器	杯立蓋	飛鳥 時代	東	9流路	(12.2)	—	(3.1)	20	—	—	7.5Y5/1 灰	TK217型式(古)
45	15	—	須恵器	杯身	古墳 ～ 飛鳥 時代	東	9流路	(11.7)	—	4.3	40	内面：見込みヨコナデ 外面：底面回転ヘラケズリ(砂←、3回転)	10Y6/1 灰	受付種14.2cm 立ち上がり高0.7cm 立ち上がり角70° TK209型式か	
46	15	11	須恵器	甕	古墳 ～ 飛鳥 時代	東	9流路	(41.0)	—	(8.2)	10 以下	内面：灰かぶり 外面：波文状のち四線文(2巻1帯)	N4/0 灰	吹け玉	
47	15	11	須恵器	高杯 脚部	古墳 時代	東	9流路	(10.1)	—	(9.3)	70	内面：継ぎ目あり 外面：脚部中に円線文(2巻1帯)	N5/0 灰	TK200型式か	
48	15	—	土師器	甕	飛鳥 時代	東	9流路	(19.6)	—	(4.2)	10	外面：ヨコ方向のヘラミガキ 口縁部面もつ	10YR6/3 にぶい黄褐	飛行2か	
49	15	—	土師器	甕	古墳 ～ 飛鳥 時代	東	9流路	(19.0)	—	(13.0)	10	内面：タ方方向の板ナデ 外面：表面漸離縞(タテハケか)	2.5Y3/1 黒褐	受付種14.2cm 立ち上がり高0.7cm 立ち上がり角70° TK209型式か	
50	16	—	須生 土器	広口甕	弥生 時代	東	9流路	(20.2)	—	(7.0)	10 以下	内面：ヨコ方向のヘラミガキカナデ 外面：ヨコ方向のヘラミガキカ (摩耗しており不鮮明)	10YR6/2 灰黄	II種式	
51	16	—	須生 土器	甕	弥生 時代	東	9流路	(15.6)	—	(4.8)	10 以下	内面：摩耗のため調整不鮮明 外面：タテハケ	10YR5/2 灰黄	II種式か	
52	16	—	須生 土器	広口甕	弥生 時代	東	9流路	(3.0)	(4.0)	—	10	全面摩耗のため調整不鮮明、 口縁部細目あり	7.5YR7/4 にぶい相	II種式	
53	16	—	須生 土器	底部 器台	弥生 時代	東	9流路	—	6.1	(2.2)	10 以下	外面：タテハケ 底面黒墨あり、工具痕か？	7.5YR6/3 にぶい相	II種式か	
54	16	—	須生 土器	器台口	弥生 時代	東	9流路	(25.0)	—	(3.5)	10 以下	全面摩耗のため調整不鮮明、 L.脚部に削除突文あり	7.5YR7/4 にぶい相	V種式か	
55	16	—	土師器	甕	古墳 時代	東	9流路	(7.5)	(5.0)	—	10 以下	外面：鉛文 全面摩耗のため調整不鮮明	5YR6/5 棕	臼内式併行か	
56	16	—	土師器	楕杯	飛鳥 時代	東	9流路	(6.8)	(5.5)	—	10 以下	内面：剥離状態 外面：内面ヘラケズリ	7.5YR5/3 にぶい相	7.5YR5/3 にぶい相	
57	16	—	土師器	甕	飛鳥 時代	東	9流路	(17.0)	—	(19.9)	20	内面：内面底部ヨコハケ、体部指押さす。 粘土接合痕(内側接合)	7.5YR5/3 にぶい相	7.5YR5/3 にぶい相	
58	16	11	瓦質 土器	高杯	古墳 時代	東	9流路	(15.0)	—	(4.7)	10	外面：瓦質黒化	N3/0 灰	TK232型式期か	
59	16	—	須恵器	杯立蓋	飛鳥 時代	東	9流路	(11.2)	—	3.3	30	内面：見込みヨコナデ、粘土貼の接合痕 あり 外面：天井部ヘラ引け未調整、粘土貼付 着、回転ヘラケズリ	N5/0 灰	TK217型式(古)と 飛鳥1か	

遺物番号	捕獲番号	写真 図版 番号	種別	器形	時期	調査 区名	造営名 部位名	法量(単位cm)		残存 率 (%)	成形及び調節の特徴等 (ヨコナデ・ヨクナデは輪軸、砂→はヘラ ケズリにより研が削った方向)	外色調	備考	
								L径・ 底径・ 長	器高・ 幅					
60	16	11	須恵器	有蓋 杯	古墳 時代	東	9流路	13.5	—	4.8	60	内面：見込みヨコナデ 外面：杯部ヨコナデ(砂→)。2~3回 正直して焼成、黒色粘土流し	N6/0灰	TK43型式か
61	16	11	須恵器	杯豆身	飛鳥 時代	東	9流路	9.5	—	3.5	100	外面：底部ハラ切り未調整、ヘラ記号あり(=)に「×」 内面：見込みヨコナデ	5V8/1 灰白	受け部径11.6cm 立ち上がり高さ3cm 立ち上がり角45° 飛鳥Ⅱ
62	16	—	須恵器	有蓋 高杯	古墳 時代	東	9流路(11.8)	—	(4.0)	25	内面：見込みヨコナデ 外面：下部回転ヘラケズリ	N3/0暗灰	受け部径14.0cm 立ち上がり高さ0.7cm 立ち上がり角45° TK209型式か	
63	16	—	須恵器	端鉢	古墳 時代	東	9流路(12.0)	—	(5.4)	10	外面：体部に2条の凹線 U脚部内側に沿る面もつ	N5/0灰	TK209型式か	
64	16	11	須恵器	無蓋 高杯	古墳 ~ 飛鳥 時代	東	9流路	11.0	6.0	5.5	70	内面：底押立 外面：杯部回転ヘラケズリ 脚部内側に段あり、正直して焼成	5B4/1 灰青灰	TK209~TK217型式
65	16	12	須恵器	甕	古墳 時代	東	9流路	—	(体部 8.6)	(5.9)	60	内面：底押立 外面：体部点立焼成、回転ヘラケズリ(砂→、 3~4回転)、凹線あり	N4/0灰	U脚部基径3cm 体部高5.6cm TK209型式
66	16	12	須恵器	甕	飛鳥 時代	東	9流路	—	(体部 9.0)	(7.1)	60	内面：底押立 外面：肩部凹線あり、体部回転ヘラケズリ (砂→、8~9回転) 穿孔部打ち欠き、黒色粘土流し	10Y7/1 灰白	U脚部基径3.0cm 体部高3.2cm TK217型式(飛鳥Ⅱ) か 67と同工品
67	16	12	須恵器	甕	飛鳥 時代	東	9流路	—	(体部 10.0)	(6.9)	60	内面：底押立 外面：肩部自然崩れ、凹線あり、体部回転 ヘラケズリ(砂→、8~9回転) 黒色粘土流し	5PB7/1 明青灰	U脚部基径3.0cm 体部高6.7cm TK217型式(飛鳥Ⅱ) か 66と同工品
68	16	12	須恵器	端鉢	古墳 ~ 飛鳥 時代	東	9流路(11.8)	—	(18.4)	40	内面：見込み底かぶり(蓋のない状態で焼成、蓋のない器種) 外面：縦溝凹線、肩部点立焼成・凹線、回 転ヘラケズリ(砂→)、底かぶり 黒色粘土流し	N6/0灰	U脚部基径3.2cm 体部高6.9cm	
69	16	—	須恵器	横瓶	古墳 時代	東	9流路	—	—	(15.1)	30	内面：底押立 外面：格子タキのちカギ目(2~3cm間 隔)、自然崩れあり、沿着崩れあり 蓋をした上に上にタテ置きで焼成	5Y7/1 灰白	TK23~47型式か
70	16	12	木器	串串か	—	東	9流路	19.8	4.5	0.6	—	内端尖らせ、焦げている	ヒノキ	
71	16	—	旁生 土器	底部	弥生 時代	東	9流路	(6.0)	—	(3.7)	—	内面：粘付接合痕あり 全面摩耗のため調整評	10Y6/3 にぶ・黄褐	
72	16	—	須恵器	杯蓋	古墳 時代	東	9流路	—	(2.7)	25	内面：見込みヨコナデ 外面：天部回転ヘラケズリ(砂→)、 底かぶり	N6/0灰	TK23~47型式か	
73	16	—	須恵器	杯蓋	飛鳥 時代	東	9流路(11.8)	—	(2.9)	10	内面：底押立 外面：天部回転ヘラケズリ	N6/0灰	TK217型式(古)と 飛鳥Ⅰか	
74	16	—	土器	甕	飛鳥 時代	東	9流路(17.6)	—	(8.5)	以下	10 内面：指押さえのちヘラケズリ又はナデ 以下 U脚部若干面もつ	7.5YR6/3 にぶ・褐		
75	18	13	瓦器	輪	平安 ~ 鎌倉 時代	西	6土坑	15.5	—	5.8	100	内面：ヘラミガキ(3~4mm幅)、見込み にジグザグ状の凹文(通常の粗張 型の凹文の深さと異なる) 外面：上部ののみヘラミガキ(3~4mm 幅)、U脚部ヨコナデ1段	N2/0灰 10Y7/1 灰白	瓦の内貼り付け甲斐に 来ていません 高台5.2m、高台 G3.0cm、器壁0.3~ 0.5cm 和室型Ⅱ~3~期
76	18	13	瓦器	輪	平安 ~ 鎌倉 時代	西	6土坑	15.3	—	4.9	90	内面：ヘラミガキ(2~3mm幅)。見込み に単位不規則な不定方位ヘラミガ キ 外面：指押さえのちヘラミガキ(2~3mm 幅)、U脚部ヨコナデ1段	N3/0暗灰	高台4.2cm、器壁 0.3~0.5cm 和室型Ⅱ~3~期 内面とも瓦貼付 0.1~0.3cm幅の円形 の剥離多くあり
77	18	13	瓦器	輪	平安 時代	西	6土坑(14.8)	—	6.0	25	内面：ヘラミガキ(1~2mm幅)。見込み に連続長椭円形の凹文 外面：指押さえのちヘラミガキ(2mm前後 幅)、U脚部ヨコナデ1段	N3/0暗灰	高台5.6cm、高台 G4.0cm、器壁0.5~ 0.6cm 構築型Ⅱ~1~期か	
78	18	13	瓦器	輪	平安 ~ 鎌倉 時代	西	6土坑(14.3)	—	(2.4)	10 以下	内面：ヘラミガキ(1~2mm幅)(あまり明 瞭でない) 外面：指押さえのちヘラミガキ(2mm前後 幅)、U脚部ヨコナデ1段	N4/0灰	窓壁0.4cm 和室型Ⅱ~3~Ⅲ~ 1期か	
79	18	13	瓦器	輪	平安 ~ 鎌倉 時代	西	6土坑(14.4)	—	(2.4)	10 以下	内面：ヘラミガキ(1~2mm幅)(あまり明 瞭でない) 外面：指押さえのちヘラミガキ(2mm前後 幅)、U脚部ヨコナデ1段	N3/0暗灰	器壁0.4cm 和室型Ⅲ~1~2 期か	
80	18	13	瓦器	輪	平安 ~ 鎌倉 時代	西	6土坑(14.0)	—	(3.9)	10	内面：ヘラミガキ(2mm前後幅) 外面：指押さえのちヘラミガキ(1~2mm 幅)、U脚部ヨコナデ1段	N6/0灰	窓壁0.3~0.4cm 和室型Ⅲ~3~Ⅳ~ 1期か	

遺物番号	拂岡 番号	写真 図版 番号	種別	器形	時期	調査 区名	遺構名 部位名	法量(単位cm)			成形及び調査の特徴等 (ヨコナデ・ヨクナデは横軸、砂→はヘラ ケズリにより砂が削った方向)	外色調	備考	
								L径・ 底径・ 長	底幅・ 幅	器高・ 厚				
81	18	13	瓦器	瓶	平安～鎌倉時代	西	6土坑	—	(5.4)	(3.0)	15	内面：ヘラミガキ(2mm以下下彎)、見込み の明文は鉛錆状か 外面：削れのち砂刷へラミガキ(2mm 以下彎)	N2/O 黒	高台約0.4m、器壁 0.4～0.5cm 袖型かⅡ～Ⅲ 削か
82	18	—	土加器	棒・皿N	平安時代	西	6土坑	(15.8)	—	(3.2)	10	外面：指押さえ	7.5YR8/3 灰黄釉	平安京IV期 中～新
83	18	—	土加器	皿N	平安時代	西	6土坑	(9.3)	—	(1.5)	15	外面：指押さえ	10YR7/2 にぶい黄釉	平安京IV期 中～新
84	18	14	土加器	鍋	平安～鎌倉時代	西	6土坑	(35.8)	—	(7.1)	10	内面：L部底面長いヨコハケ 外面：タハケ、L縁まで保付着 以下 L縫部面つづき面)、L部底面厚みあり 体部は(縁より内側に收まる	10YR4/2 灰黄釉	
85	18	14	土加器	鍋	平安～鎌倉時代	西	6土坑	(36.6)	—	(6.4)	10	内面：頭部横線明瞭 外面：タハケのちL縁部のみヨコハケ L縫部面もつ、L部底面若干清氣味	10YR4/1 褐灰	
86	18	14	土加器	鍋	平安～鎌倉時代	西	6土坑	(36.0)	—	(4.8)	10	内面：L部底ヨコハケ、頭部横線明瞭 外面：タハケ 以下 L縫部面つづき面)、L部底面厚みあり 体部は(縁より内側に收まる	10YR7/2 にぶい黄釉	
87	18	14	土加器	鍋	平安～鎌倉時代	西	6土坑	(37.6)	—	(7.0)	10	内面：ハケ(7mm)、L部底ヨコハケ(4 本/cm)、体部のハケと工具異なる 外面：タハケのち指押さえ、L縫部ま で保付着 L縫部面つづき面)、L部底面厚みあり 体部は(縁より内側に收まる	10YR4/1 褐灰	
88	18	14	土加器	鍋	平安～鎌倉時代	西	6土坑	(36.4)	—	(9.9)	10	内面：ヨコハケ、頭部横線明瞭 外面：タハケのち指押さえ L縫部面もつ、L部底面厚みあり 体部は(縁より内側に收まる	2.5Y6/2 灰黄	
89	18	14	土加器	鍋	平安～鎌倉時代	西	6土坑	(38.0)	—	(6.7)	10	内面：L部底ヨコハケ 外面：タハケのち指押さえ、L縫まで 保付着 L縫部面つづき面)、L部底面厚みあり 体部は(縁より内側に收まる	10YR4/1 褐灰	
90	18	14	土加器	鍋	平安～鎌倉時代	西	6土坑	(30.8)	—	(3.8)	10	内面：L部底ヨコハケ、頭部横線明瞭 外面：タハケ 以下 L縫部面つづき面)、L部底面厚みあり 体部は(縁より内側に收まる	7.5YR5/1 褐灰	
91	18	14	土加器	羽釜	平安～鎌倉時代	西	6土坑	(31.0)	—	(7.5)	25	内面：ヨコハケ 外面：タハケ、跨下に保付着 L縫部底丸く收める	7.5YR7/4 跨上3.8cm, 跨下2.3cm	
92	18	14	土加器	羽釜	平安～鎌倉時代	西	6土坑	(34.4)	—	(7.7)	10	外面：跨下タハケ、保付着 L縫部底面もつ	5YR6/6 橙	跨上4.5cm, 跨下2.0cm
93	18	14	白磁か	瓜形合子の身	平安～鎌倉時代(宋)	西	6土坑	—	5.3	(6.5)	80	内面：中空以下施釉、見込みに釉が薄青 色にたまる 外面：立ち上がり部及び底部付近露胎、 中位施釉、ややくすんだ白色、全 面貫入りあり、範圍方向に幅2mm・深 さ0.5mmの溝を6ヶ所に施す 下部は回転(ラケ)り	(輪) 2.5Y7/2 灰白 (高地) 10YR5/2 灰黄釉	体高4.5cm、 立ち上がり高2.0cm 黄土部幅0.6cm 中国福建吉安南安窑產 か
94	18	14	白磁	瓶	平安時代(宋)	西	6土坑	—	(6.7)	(3.4)	30	内面：施釉、見込みに開隙(段)あり 外面：上半施釉、底部露胎、回転ラケ ズリ。置付けボルツル(使用痕) —	(輪) 2.5Y8/1 灰白 (高地) 2.5Y8/1 灰白	白磁瓶IV-1類
95	18	—	瓦質土器	擂鉢	平安時代か	西	6土坑	(14.0)	—	(7.1)	20	内面：細かい削痕あり。ツルツル(すり跡 として使用) 外面：底面ヘラケズリ 内外一部被砂か?保付着	N4/O 黑	史跡系の砾か 須恵器の焼不成良品か
96	18	15	土加器	移動式窯	平安～鎌倉時代	西	6土坑	(16.8)	(11.3)	1.1	10	内面：ヨコハケ(条間1.5～2mm幅)、全体 に保付着 外面：タハケ、焚口部突宍あり、隔壁 に突起あり	2.5Y7/2 灰黄	焚口部分の破片 内面に小動物の爪痕 あり
97	19	13	石器	硫石	平安～鎌倉時代	西	6土坑	(12.7)	(2.2)	(2.2)	—	2面研磨面あり、他の2面は自然面		粘板岩製(中～上 清流)、 破壊品か
98	19	13	石器	硫石	平安～鎌倉時代	西	6土坑	9.9	4.8	3.5	100	硫面に削痕はほとんど見られない		砂岩製(荒～中研か)
99	19	—	鉄器	鐵鍬	平安～鎌倉時代	西	6土坑	(3.2 +2.8)	1.0	—	—	闇は台形か		

遺物番号	排段番号	写真 図版番号	種別	器形	時期	調査区名	施設名	法量(単位cm)			残存率(%)	成形及び調製の特徴等 (ヨコナデ・田軸ナデは省略、砂→はヘラ ケズリにより砂が動いた方向)	外色調	備考
								L径・ 底径・ 幅	底径・ 幅	器高・ 厚				
100	19	15	木器	底板か 籠合 時代	平安 ~ 鎌倉 時代	西	6土坑	21.5	12.5	0.9	—	片面焼け焦げる		ヒノキ
101	19	—	木器	加工 木材	平安 ~ 鎌倉 時代	西	6土坑	33.2	12.8	3.1	—	加工部分あり		ミカン削して一部加工したものか ムクノキ
102	19	15	木器	加工板 材	平安 ~ 鎌倉 時代	西	6土坑	32.2	6.5	0.7	—	凸溝あり(幅約1cm、3寸か)		スギ
103	19	15	木器	加工板 材	平安 ~ 鎌倉 時代	西	6土坑	24.5	4.5	0.8	—	凸溝あり(幅約1cm、3寸か)		スギ
104	19	15	木器	加工 板材	平安 ~ 鎌倉 時代	西	6土坑	57.5	10.8	0.8	—	①曲：中央に凸溝(幅1.2~1.5cm、4~5 寸)、上部に段(幅1.2~1.5cmと幅 1.2~1.3cm) ②溝：上下内端に凸溝(上部幅1cm、下部 幅0.9cm)あり	板長さ1尺9寸× 幅3寸5分 入半	
105	21	15	土師器	羽釜	鎌倉 ~ 室町 時代	東	10溝 (34.4)	—	(8.9)	10 以下	口縁部若干面もつ	5YR6/3 にふく槽	口径4.7cm, 鉢長2.3cm	
106	21	15	土師器	羽釜	鎌倉 ~ 室町 時代	東	10溝 (33.8)	—	(8.9)	10 以下	内面：ヨコハケ 外面：口縁部直下に段あり。指押され 口縁部面もつ	10YR2/2 にふく槽 5YR6/4 にふく槽	口径3.8cm	
107	21	15	瓦質 土器	足釜 脚部	鎌倉 ~ 室町 時代	東	10溝	10.9	2.7	2.3	—	内面：ヨコハケ	N5/0 黒	
108	22	15	須恵器	甕	平安 時代	西	7溝 (24.2)	—	(8.2)	10 以下	内面：体部ナナメナデ 外面：平行タタキ(条間3~4mm幅)、 底かぶり	N6/0 黒	東唐系の須恵器 神田跡窯窯跡	
109	22	15	備前焼	擂鉢	室町 時代	西	7溝 (25.6)	—	(7.3)	10	内面：目口6条(条間3~4mm幅) 外面：口縁部底かぶり、重ね燒き痕あり	N4/0 黑	開闢初期	
110	23	—	瓦	丸瓦	平安 時代	東	機械 削削	(9.6)	(8.5)	2.1	—	四面：舟形あり、面取りあり 凸面：若干自然釉かかる	N5/0 黑	古代 古吉原瓦窯か



# 写 真 図 版

## 写真図版 1



2. 西区 南壁断面（北から）



4. 東区 東壁断面（南から）



1. 西区 南壁断面（西から）



3. 東区 東壁断面（南から）

写真図版 2



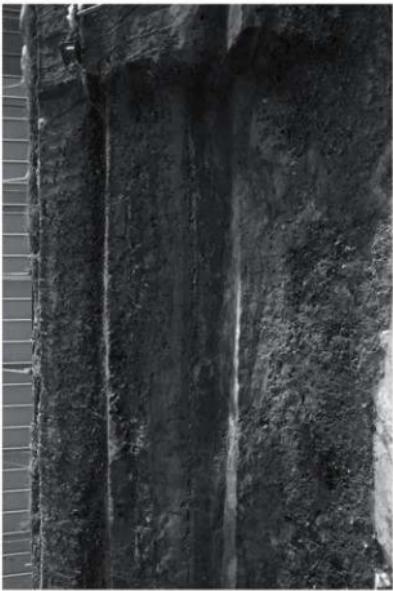
2. 東区 南壁断面（西北から）



4. 東区 南壁断面（西北から）



1. 東区 南壁断面（西から）



3. 東区 南壁断面（西北から）

### 写真図版 3



1. 東区 全景（南西から）



2. 東区 垂直写真



1. 西区 全景（北から）



2. 西区 全景（北から）

## 写真図版 5



1. 東区 全景（北から）



2. 9流路（南東から）



1. 6土坑 断面  
(南東から)



2. 6土坑 遺物出土状況  
(南から)



3. 6土坑 遺物出土状況  
(北から)

## 写真図版 7



1. 6土坑 最下層遺物  
出土状況（北から）



2. 10溝 断面  
(南東から)



3. 10溝 全景  
(北西から)



1. 9流路 遺物出土状況（北から）



2. 9流路 遺物出土状況（南西から）



3. 9流路 遺物出土状況（北から）



4. 9流路 遺物出土状況（東から）

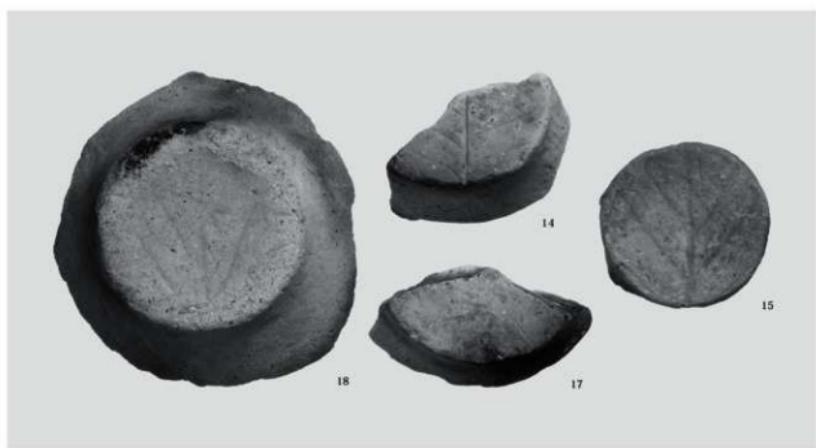
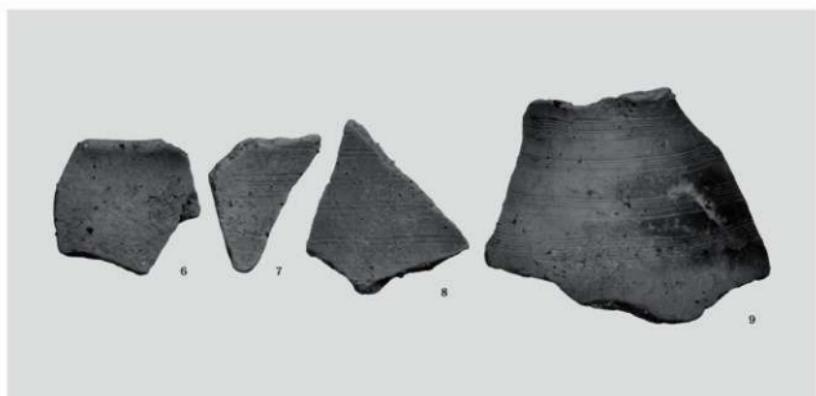
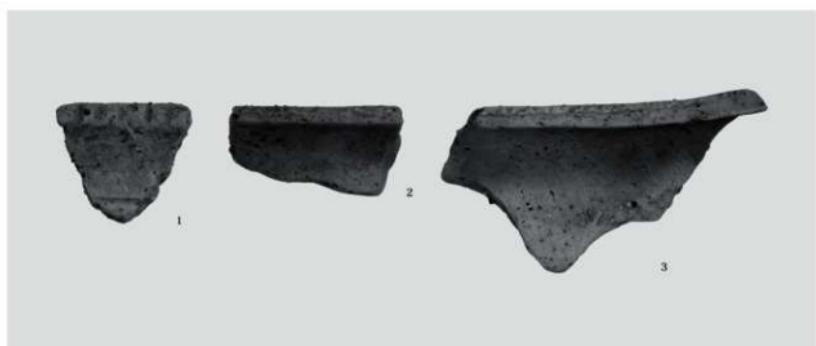


5. 9流路 遺物出土状況（南から）



6. 9流路 遺物出土状況（東から）

写真図版 9



9 流路 出土遺物



21

22

24

23

25



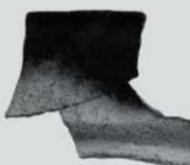
26



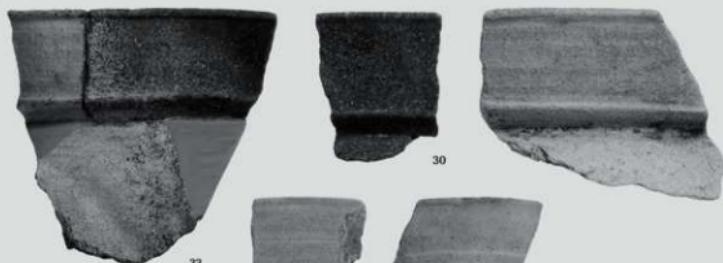
27



28



29



30

33

31

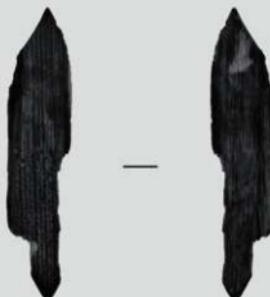
32

34

写真図版 11



9 流路 出土遺物



写真図版 13



75



76



77



80



79



81



97

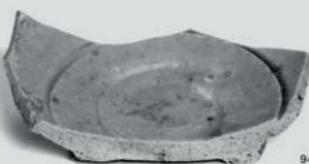


98

6 土坑 出土遺物



93



94



90



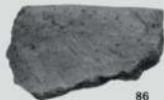
88



87



85



86



84



85



90

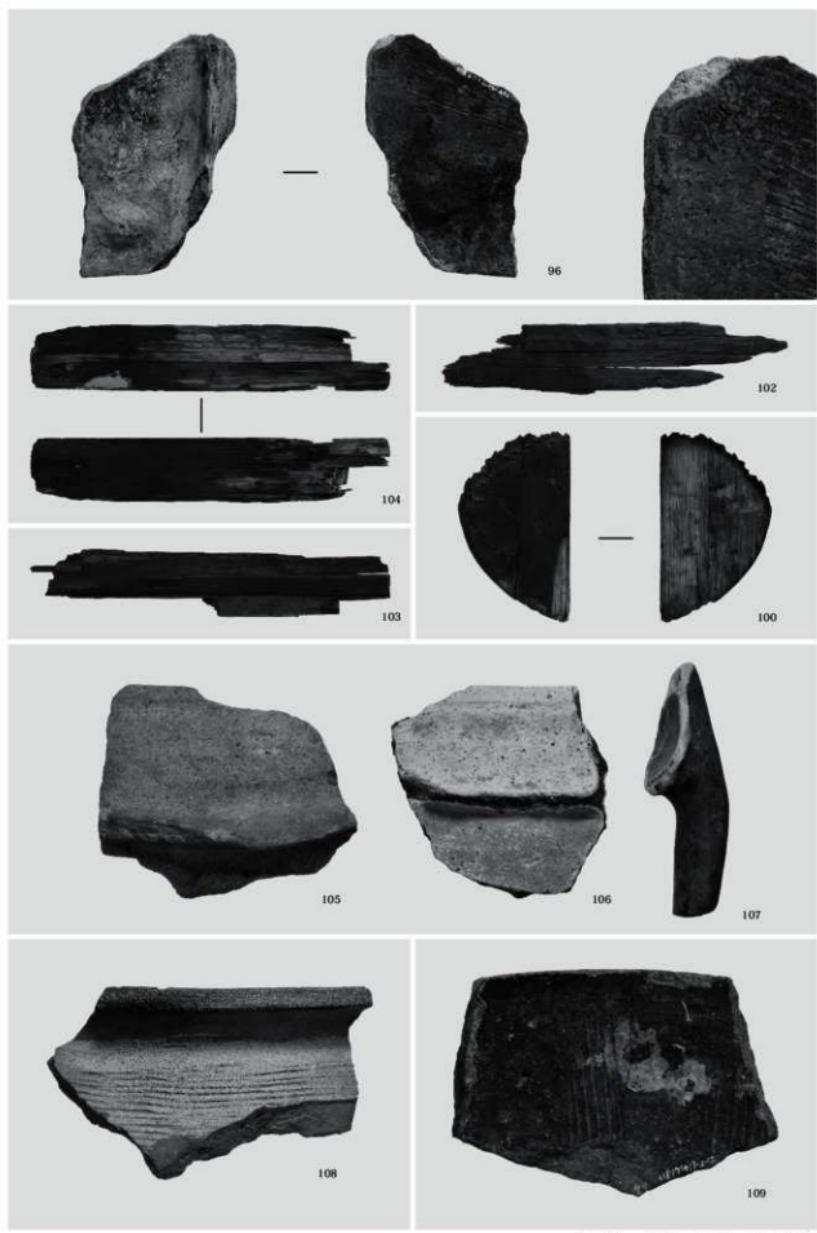


92



91

写真図版 15



6 土坑・10溝・7溝 出土遺物

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	すいたそうしゃじょういせき						
書名	吹田操車場遺跡 16						
副書名	北大阪健康医療都市（健都）2街区高齢者向けウェルネス住宅整備・運営事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次数							
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター 調査報告書						
シリーズ番号	第292集						
編著者名	鹿野 畠						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒 590 - 0105 大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号 TEL 072 - 299 - 8791						
発行年月日	2018 年 6 月 29 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
すいたそうしゃじょう 吹田操車場 いせき 遺跡	おおたかみすいたし 大阪府吹田市 ましらんまち 岸部新町	27205	73	北緯 34° 46' 31" 東経 135° 32' 10"	平成29年10月2日 ～ 平成29年12月28日	2,401 m <sup>2</sup>	北大阪健康医療都 市（健都）2街区高 齢者向けウェルネ ス住宅整備・運営
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
吹田操車場 遺跡	集落 生産地	弥生時代	流路		弥生土器		
		古墳時代	流路		土師器・須恵器・瓦質土器		
		古代	流路		土師器・須恵器・灰釉陶器・ 木器(柵串か)		
		中世	土坑・溝		土師器・須恵器・瓦器・ 瓦質土器・白磁・木器	中国福建省産の白磁合子 か	
要 約	<p>今次調査では、弥生時代前期から古代・中世に至る流路、中世の土坑・溝を検出した。</p> <p>調査区のおよそ半分を占める流路は、近隣の調査で既に検出されている流路と同一のものであり、弥生時代前期から飛鳥時代まで、若干その位置を変えながらも同じ場所を流れていた。調査地は、流路が長期に亘って存在し、それに伴う湿地帯が形成され、草木が生い茂るような環境であったと類推する。そのため、流路は当地において土地利用の境となり得る性質のものであった。</p> <p>中世に属する土坑からは、白磁かと考えられる瓜形合子が、12世紀後半から13世紀初頭に属する遺物とともに出土した。極めて希少な遺物と思われ、その故地は中国福建省である蓋然性が高い。当時の流通を考える上で貴重な成果があった。</p>						

公益財團法人 大阪府文化財センター調査報告書 第292集

## 吹田操車場遺跡 16

北大阪健康医療都市(健都)2街区高齢者向けウェルネス住宅整備・  
運営事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2018年6月29日

編集・発行／公益財團法人 大阪府文化財センター

大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本／株式会社 明新社

奈良市南京終町3丁目464番地